

令和 7 年度

在外教育施設派遣教員 帰国報告集



主催 兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

共催 兵庫 OV 教員研究会 青年海外協力隊兵庫県 OB 会

後援 兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会 JICA 関西

期日 令和 7 年 6 月 14 日

開場 JICA 関西

は じ め に

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

会長 田中 秀滋

(神戸市立桜の宮小学校長)

日頃より兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（兵海研）の諸活動・事業に対してご理解・ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。私たち兵海研は、在外教育施設への派遣経験をもとに、国際理解教育・帰国子女教育・多文化共生教育などの取り組みを推進しています。「兵庫から良い先生を送り出そう！」を合言葉に、在外教育施設からの帰国教員による帰国報告会や多文化共生・国際教育セミナー（派遣希望者研修会）、派遣教員への支援活動、情報交換会などの諸事業に取り組んでいます。

さて、本日ここ神戸にて「国際理解教育研修会 令和7年度在外教育施設派遣教員帰国報告会」を開催することができました。ご多用の中、在外教育施設並びに青年海外協力隊での実践を発表していただく先生方、本研修会にご参加いただいた先生方、心よりお礼申し上げます。

帰国教員の皆様、海外でのご勤務、本当にお疲れ様でした。アフターコロナとはいえ、国際政治や経済が不安定な中での海外勤務は、苦労や困難が多々あったことと思います。学校経営上の課題をはじめ、教育活動上の課題、児童・生徒の多様化に関わる課題、そして、テロや自然災害・治安問題・衛生問題など、安全に関わる課題など、国内では考えられない問題にも対応されたことでしょう。派遣教員の皆様が責務を全うされ、無事に元気に帰国されましたこと、心より嬉しく思っています。

また、帰国後約2か月が経過し、久しぶりの日本での学校現場やそれぞれの職種において、日々奮闘されていることでしょう。「海外での勤務は遠い過去のことのよう…」と、感じておられているかもしれません。「海外での貴重な経験を帰国後どのように生かしていくか」というのは、とても難しい問題です。帰国後すぐに、今の学校やクラス・地域で生かすことができる…というほど簡単なものではありません。しかしながら、教育界だけではなく、社会全体も先生方の経験を求める方向に確実に進んでいます。グローバルな時代の中、多様な文化・価値観を尊重する態度や外国語・異文化への柔軟な対応力、国際的な人権感覚、自分の考えをもち、積極的に交流を図るコミュニケーション能力など、先生方が海外で身に付けられた資質・能力は、日本人全体、とりわけ未来に生きる子供たちにとって、大変重要なものです。

すでにご存知のように、文部科学省や県教委・各市教委からは、全海研・兵海研に対して「派遣経験を国際理解教育や帰国子女教育、多文化共生教育の分野で生かしてほしい。」という言葉を送っています。多くの方々の期待に応えるべく、是非日々の教育をはじめ、様々な場面で創意工夫をしながら、海外での経験を大いにご活用いただきたいと思います。

最後になりましたが、本研修会を実施するにあたり、兵庫県教育委員会をはじめ、神戸市教育委員会・JICA関西・兵庫OV教員研究会・青年海外協力隊兵庫県OB会など、多くの方々のご支援・ご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

今後共、兵海研の諸事業にご理解とご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

国際理解教育研修会

令和7年度在外教育施設派遣教員 帰国報告会～

1 日 時 令和7年6月14日（土） 午前9時30分～午後16時00分
2 場 所 JICA関西・Zoom

3 日 程

9:30 受付
9:45 開会行事
 (1) 開会あいさつ()
 (2) 来賓あいさつ()
 (3) 事務局より
10:00 帰国報告（1人30分）移動質疑応

	時刻	派遣先	氏名・所属校
①	10:00	フランクフルト日本人国際学校	西宮市立甲子園浜小学校 飯塚 泰晴
②	10:30	セチュラ郡役所(ペルー)	神戸市立大原中学校 福原 くみこ
③	11:00	バンコク日本人学校	明石市立錦城中学校 日生下 瞳
④	11:30	シンガポール日本人学校 (Zoom)	明石市立大久保中学校 宮本 健志
	12:00	昼食（1時間）	
⑤	13:00	ジャカルタ日本人学校	尼崎市立園田小学校 中嶋 来未
⑥	13:30	バンクン教員養成校（ラオス）	宝塚市立安倉小学校 山本 佳奈
⑦	14:00	ミュンヘン日本人国際学校	シニア 杉本 裕司
	14:30	休憩（15分間）	
⑧	14:45	台北日本人学校	姫路市立青山小学校 清瀬 裕史
⑨	15:15	サウスダイ郡教育事務所（ガーナ）	西宮市立北夙川小学校 桑名 佑典
⑩	15:45	プラハ日本人学校	姫路市立花田小学校 三浦 一郎

※時間はおおよその目安です。また、都合により発表の順序を入れかえることがあります。

15:45 閉会行事
 (1) 閉会あいさつ
 (2) 事務局より

帰国報告書目次

1	フランクフルト日本人国際学校	西宮市立甲子園浜小学校	飯塚 泰晴	・ ・ ・ ・ 1
2	セチュラ郡役所(ペルー)	神戸市立大原中学校	福原 くみこ	・ ・ ・ ・ 3
3	バンコク日本人学校	明石市立錦城中学校	日生下 瞳	・ ・ ・ ・ 5
4	シンガポール日本人学校 (Zoom)	明石市立大久保中学校	宮本 健志	・ ・ ・ ・ 7
5	ジャカルタ日本人学校	尼崎市立園田小学校	中嶋 来未	・ ・ ・ ・ 9
6	バンクン教員養成校 (ラオス)	宝塚市立安倉小学校	山本 佳奈	・ ・ ・ ・ 11
7	ミュンヘン日本人国際学校	シニア派遣	杉本 裕司	・ ・ ・ ・ 13
8	台北日本人学校	姫路市立青山小学校	清瀬 裕史	・ ・ ・ ・ 15
9	サウスダイ郡教育事務所 (ガーナ)	西宮市立北夙川小学校	桑名 佑典	
10	プラハ日本人学校	姫路市立花田小学校	三浦 一郎	・ ・ ・ ・ 17

紙面発表

11	ジョホール日本人学校	姫路市立古知小学校	中川 英毅	・ ・ ・ ・ 19
12	広州日本人学校	加西市立北条東小学校	兵藤 大輔	・ ・ ・ ・ 21
13	香港日本人学校	高砂市立曾根小学校	市原 久士	・ ・ ・ ・ 23
14	上海日本人学校	姫路市立大津小学校	林 優也	・ ・ ・ ・ 25
15	北京日本人学校	宝塚市立逆瀬台小学校	北野 淳也	・ ・ ・ ・ 27
16	パリ日本人学校	明石市立大久保南小学校	荻野 竜平	・ ・ ・ ・ 29
17	ローマ日本人学校	伊丹市立南中学校	濱川 理恵	・ ・ ・ ・ 31

フランクフルト日本人国際学校に赴任して

西宮市立甲子園浜小学校 飯塚 泰晴

1. フランクフルト市の概観

ドイツ中央に位置するフランクフルト市（正式にはフランクフルト・アム・マイン）は、ドイツ・ヨーロッパをはじめとする世界的な金融・証券取引の中心であり、大規模な見本市（メッセ）も催され、商業、文化芸術の合流点となる国際都市である。特に2002年（平成14年）から導入されたヨーロッパ単一貨幣ユーロの流通センターとして脚光を浴びている。人口は約80万人で、ケルンに次ぐ国内第5位の規模を誇る。中世から交易の要でもあったマイン川の畔に栄え、豊かな自然にも恵まれている。

緯度は北緯50度であり、西岸海洋性気候により比較的温暖である。日本との時差は夏時間では7時間、冬時間では8時間となる。夏は日照時間が長く湿度が低く、おおむね快適な生活を送ることができる。一方、冬の期間は日照時間も短く曇りや霧の日が多くなる。しかし、一日の最低気温がマイナス10度を下回することは少なく、雪が平地で積もることは稀である。春や秋は季節の変化が日本ほど明瞭ではないが、一斉に花開く5月は格別な美しさがある。また、日本のような梅雨、台風、地震などはない。

公用語はドイツ語である。レストラン、ホテル、銀行、一部の商店街では英語が通じる場面も多い。人々は友好的で親しみやすく母国語に対する大きな誇りをもっている。

フランクフルト市とその周辺には、現在、約300社の日系企業、約3,000人の邦人が住んでいる。市内には日本食品店、日本食レストランもあり日本食品等を入手することは可能である。

2. フランクフルト日本人国際学校の概要

本校は1985年（昭和60年）4月に開校し、1989年（平成元年）5月には、中心市街地であるハウプトヴァッヘ駅(Hauptwache)から地下鉄（Uバーン）で20分ほどのHausen地区に新校舎が落成した。最寄り駅はインダストリーホフ駅(Industriehof)、またはグロースネルケンシュトラッセ駅(Große Nelkenstraße)となり、どちらの駅からも徒歩5分程度の距離である。2024年度現在、派遣教員、現地採用教員、事務局員、ハウスマイスター、非常勤講師の計35名のスタッフで構成されている。

本校では現地（国際）理解活動や現地校交流が大変活発に実践されてきた。これらの特色ある教育活動は、今や本校の伝統となり、子供たちに定着してきている。この財産を大切に、開かれた学校を目指して、地域住民への体育館の開放、ホームステイによる学校間交流、運動会や学校祭へ地域の方々を招待するなどの交流を継続している。また、ミュンヘン方面（小6）とベルリン方面（中2）への修学旅行を実施し、現地（国際）理解教育を進めている。2016年（平成28年）には、1996年（平成8年）開園のフランクフルト日本人幼稚園をフランクフルト日本人国際学校幼稚部に組織改編し、幼・小・中一貫の特長を生かした教育を進めている。2024年（令和6年）には、校舎3階の増築工事が終了した。

本校は小学部から中学部までの児童生徒が在学する小中一貫校である。全校児童生徒数は240名（2025年1月現在）であり、一学級は15～25名程度と少人数である。保護者の大半は日本からの駐在員であるため、児童生徒の転出入が多い。運動会や学校祭などの学校行事、委員会活動、部活動、縦割り活動などが小中合同で行われている。小学部児童は中学部生徒の姿を自身の指針にすることができ、中学部生徒は小学部児童の手本となるような言動を心がけている様子が見られる。

3. 特色ある教育実践 ～現地校との交流活動～

本校の学校経営方針では「ドイツの文化や学校と積極的に関わる学校」を掲げている。今年度も、国際社会で活躍する人材の育成に向けて、3つの目標「ドイツの生活・文化について体験的に理解を深め、慣れ親しむ」「外国語を使って積極的にコミュニケーションがとれる」「日本の文化・日本語についても理解を深めることができる」を設定し、現地（国際）理解学習や現地校交流を進めている。学習が一過性のものとならないよう、各学年の活動目的を明確に示し、活動に系統性をもたせている。

<p>中学部 日独の比較・世界へ</p>	<p>中3 政治</p> <p>中2 平和・修学旅行</p> <p>中1 異文化理解</p>
<p>高学年 ドイツ全域</p>	<p>小6 平和・修学旅行</p> <p>小5 職業</p>
<p>中学年 フランクフルト市内</p>	<p>小4 福祉</p> <p>小3 生産や販売</p>
<p>低学年 学校周辺の地域</p>	<p>季節の移り変わり</p> <p>わたしたちの町</p>

<p> 中学部 情報交換・質疑応答 相手を理解・自分を表現 </p>	<p> 中 I ホームステイ </p>
<p> 高学年 進んで打ち解けようとする 自分の考えを伝え、相手の考えを受け止める </p>	<p> Heinrich-Heine校 </p>
<p> 中学年 自分の意思を伝える 異なるものを認める </p>	<p> 現地校との交流 </p>
<p> 低学年 あいさつ 体を使って表現 </p>	<p> 現地校とのふれあい </p>

小学部1～4年生については、交流する現地校が4校あり、各学年が交流する学校が4年間同じになるよう工夫をしている。また、小学部5年生から中学部1年生までは交流校は1校であるものの、交流する学年を同学年（同年齢）にしている。このことで、子供たちは以前交流した子供たちと再会することができ、関係を深化させることができる。加えて、小学部4年生は、現地の特別支援学校との交流も行っている。

現地校交流を楽しみにしている児童生徒が多くいる一方で、交流言語であるドイツ語に自信のもてない児童生徒にとっては緊張や不安を感じる日でもある。学年担任とドイツ語科教員とが連携を図り、ドイツ語の授業で会話を練習するなど、児童生徒が少しでも自信をもって本番に臨めるようにしている。

現地校交流では、活動について説明をしたり、思いを伝えたりする場面が必ず生まれる。交流後に振り返りをすると、児童生徒は「表情やジェスチャーで気持ちを伝えられた。」ことに気づき、「もっとドイツ語が話せるようになりたい。」という感想をもつ。同年代の子供たちと交流することで、言葉が通じなくとも心を通わせられるということや、外国語を話せるようになることで、よりコミュニケーションが図れるようになることを実感できる。現地校交流が外国語学習への動機づけとなったり、世界に目を向けるきっかけになったりしていると言えるだろう。「意味のある場面で」「意味のある情報を」「意味のある相手に」必然性のある意思疎通をするプログラムには一定の価値があり、このようなプログラムを今後も取り入れることが望ましいと考える。

ただし、現地校交流は「外国語を使って積極的にコミュニケーションがとれる」ことだけでなく、「ドイツの生活・文化について体験的に理解を深め、慣れ親しむ」「日本の文化・日本語についても理解を深めることができる」こともねらいとしている。ドイツに暮らす同年代の子供たちとの出会いを通じて、児童生徒の興味や関心を引き出したり、驚きや感動を味わわせたりする経験をさせたい。その経験が、ドイツについてもっと知りたい、もっとつながりたいと求めることにつながるものとなるだろう。また、ドイツ文化・ドイツ語との比較を通して、日本文化・日本語についても見つけ直すことができる機会となるだろう。だからこそ、先述したことと相反するが、うまく言葉が通じなくとも楽しめ、積極的に取り組める内容のプログラムを計画することもまた重要であると考え。

4. 成果（派遣教員として得たもの）

現地校交流は、これまでの交流に基づいた特定の学校との関係の継続である。現地採用教員や事務局長を始めとする多くの方々が今日まで交流活動を支えてきた。そして、これからも本校の誇る特色であり伝統として受け継がれる。このような活動の一端を担う経験ができたことは、筆者にとってかけがえのない喜びであった。

筆者は、今後も兵庫県の教員として国際理解教育、多文化共生教育に携わっていく。本校での3年間、全国各地からの派遣教員や現地採用教員など、たくさんの人との出会いがあり、多くの学びを得ることができた。国内において、本校の現地（国際）理解活動や現地校交流をそのまま応用させることは困難であるが、研究や実践の成果を広めていきたい。そして、これからも児童生徒が多様な価値観を認め合い、共生・協心の心を育む教育の推進に寄与したい。



1 赴任国の概観

ペルー共和国は南米大陸の太平洋側に位置し、日本の約3.4倍の面積をもつ。人口は約3,435万人。先住民の他に、メスティソ（混血）、白人系、アフリカ系、日系・中国系の民族から成り立っている。20万人以上の日系ペルー人がペルーで暮らしており、リマや地方都市を中心に日系社会が存在している。主に3つの地域（海岸・山岳・熱帯雨林）があり、国土の約60%はアマゾン川の源流がある熱帯雨林地域である。言語はスペイン語・ケチュア語・アイマラ語が話され、宗教はカトリック教が中心だが、新興宗教を熱心に信じている人も一定数いる。

2 所属先の概要

赴任先であるピウラ州セチュラ郡は郡として州から認定されて31年が経ち、太平洋から車で約15分走らせた砂漠地帯の中にある小さな漁師町である。人口は約8万人で、老人より子供の数が圧倒的に多い。15歳ぐらいになると第1子を出産し、平均5～8人は出産する。その為、現地校は午前と午後の2部制となっている。登校前や授業後の時間は保護者の下で働き、また、自宅で弟や妹の世話をし家族を支えている。主な産業は漁業・農業・リン鉱山発掘である。特にホタテの養殖が盛んであり、中国や日本にも輸出している。住民の約7割は貧困家庭であり、彼らの多くは貯金などなく、その日暮らしをして生計を立てている。

所属先である「セチュラ郡役所」は、町の中心にあり、11の部署と22の課から成り立っている。職員数は約400名であるが、そのほとんどは非正規採用である。年間を通して人事異動・解雇等が激しく、また、4年に一度郡長選挙が行われ、政権が変わるとほぼ全ての職員が入れ替わる為、雇用に安定性はない。町中にはごみ箱とごみ収集車の数が圧倒的に足りておらず、住民達は家庭で出たごみを自宅前の道路脇や川に捨てている為、町はごみで溢れている。

3 活動内容

所属先からの要請は、1. 小中学校等教育現場での環境教育の実施 2. 家庭訪問や住民集会による住民啓発活動 3. 教育関係者への廃棄物関連指導であった。私は郡役所の「保健・環境課」に配属され、「環境教育隊員」として主に廃棄物処理に関する活動を行った。任地セチュラでのJICAボランティアは約10年前から派遣されており、私で4代目である。

（1）小中学校等教育現場での環境教育の実施

学校訪問に関しては、カウンターパート（上司）の意向と予算の関係上、年間5校のみを訪問し、児童・生徒達に環境教育を実施することになった。もっと多くの学校訪問を期待していたが、予算の関係



上5校以上は難しいようだった。そこで、徒歩可能な距離の学校を自己開拓し、直接校長

や教師にアポを取り授業をさせて頂けるよう交渉した。また、夏休み等の夏季休業を利用し、町中にある図書館や教育施設等で活動を実施、1年半で11の地域で77回、合計1,786人の児童生徒達に環境教育の



大切さを伝えることができた。その中でも町内 4 校の学校と所属課が提携を結び、約 2 ヶ月間に渡り定期的な授業の他、使用済みペットボトルを再利用したごみ箱を生徒や保護者達と制作した。

(2) 家庭訪問や住民集会による住民啓発活動

所属課は「環境課」の他「保健課」も兼ねている。町中は十分な医療を提供できる医療施設が整っておらず、職員達は週数回のペースで医者や看護師、心理カウンセラー達を連れて貧困地域に赴き、住民達に無料の診療や薬の提供をしている。私も同僚達と一緒に現地に行き、診療待合時間を利用して住民達に啓発活動を行った。1 年半で 74 回、3,146 人の地域住民の方々に環境に対する啓発活動を実施した。



(3) 所属課主催によるイベントの実施

所属課である「保健・環境課」では、同僚達と一緒に啓発活動を兼ねたイベントを企画・実施をした。主な内容としては、住民達から使用済みペットボトルや古着を回収し、映画券やドリンク・ポップコーンと引き換え、住民達が無料で町内にある公会堂で映画を楽しむことができる企画であった。1 年目は大いに課題が残ったが、2 年目は同僚達とカイゼン（改善）を繰り返した。反響が大きく、郊外でも開催でき多くの住民達から感謝の言葉を頂くことができた。また、休日や海開き前には同僚達と地域の清掃活動や各家庭を訪問しリサイクル用品回収等を行った。



(4) 日系ペルー人とのイベント実施

ペルーには戦前・戦後主に沖縄や西日本からの移住者達が暮らしており、日系ペルー人と呼ばれている。州内に日系コミュニティがあり、同州で活動している JICA ボランティアや日系ペルー人達と環境に関する啓発活動を絡めた日本文化紹介を企画・実施することができた。



4 成果

現職参加の為、約 5 ヶ月早く同期隊員より帰国する限られた時間の中で、後悔することだけはしたくない、任地で精一杯頑張ろうと思いながら日本を離れた。言葉も文化も常識も異なる異国の地で、任地の方々と課題解決に取り組むことは想像以上に大変であり、目に見えた大きな成果を残すことはできなかった。しかし、困難な生活状況の中で私を支え、大らかな心で受け入れてくれたのは間違いなく 18 ヶ月間を共に過ごしたセチュラの人達である。貧しさの中でも彼らはよく喋り、笑い、そしてお互い助け合い、共に困難を乗り越えようとたくましく生きる姿に心から感動した。また、日本から遠く離れたペルーの地で日本にルーツを持った方々が暮らしていること、移住した当初の暮らしは過酷であった中でも日本人である私を優しく迎え入れてくれたことに人の温かさを肌で感じ得た。「貧しさとは・・・豊かさとは・・・」ペルーでの生活は一生忘れることができない中身の詰まった 18 ヶ月間である。

参考文献：外務省 HP

1. 赴任地（国）の概観

タイ国の首都であるバンコク都は、国内最大の都市で、政治・経済・文化の中心地である。タイ語では「クルンテープ（天使の都）」と呼ばれている。現在バンコク都には、日本人が多く住むワッタナー区やクロントゥーイ区のほか、50の区がある。

気候は3つに分かれて

おり、1つ目が平均気温が30℃ほどあり、40℃まで上昇することのある暑季（3月～5月）、2つ目が晴れ間もあるが連日1時間ほどスコールが降る雨季（6月～10月）、3つ目が晴天が続く、爽やかな気候が続く乾季（11月～2月）となっている。

タイの国教は仏教であり、国民の9割以上が仏教徒で、タイ全土には約3万の仏教寺院が存在する。町中では僧侶に遭遇する機会も多く、人々は日常的に徳を積むことを意味する「タンブン」を行っている。また、ヒンドゥー教の影響も受けており、様々な祠や神像が見られる。タイの言語はタイ語で、地方によって方言が存在する。バンコクでは、公共の施設やレストランなどで英語も通じる。日本企業が多く進出し、世界で最も多くの日本人が居住する都市の一つとされているので、日本人街も大きく、生活するのに困らないほど施設なども充実している。



2. 赴任校の概要

タイ国にはバンコクとシラチャに日本人学校がある。2024年の生徒数は、バンコク日本人学校が2,170人、シラチャ日本人学校は400人である。私が勤務したバンコク日本人学校は、世界で一番歴史の長い日本人学校で、規模も世界一である。小学校と中学校が同じ敷地内にあり、校舎は6棟ある。私が所属した中学部の校舎は5年ほど前に建て替えたばかりで綺麗な校舎であった。グラウンドは人工芝で、タータンもある。各クラスにテレビやプロジェクターが設置され、ICT機器を活用した授業も十分に行うことができる。児童生徒の殆どがスクールバスを利用しており、100台ほどのスクールバスが整列して敷地内に停車している様子は、バンコクならではの光景である。教職員も、教職員用バスで通勤している。スタッフは、教職員が160名ほどおり、職員室は4つある。その他に、事務職員、タイ人スタッフの用務員の方々、警備員や警察官も配置されている。毎週金曜日にはオンライン職員会議で情報共有や連絡事項の確認を行い、「Team バンコク」として職員一同、一致団結して日々の業務に励んでいる。

3. 特色ある教育実践

（1）小中交流

小学校と中学校が同じ敷地内にあるので、小中交流が活発である。令和6年度は「ゆめ集会」と「TJAS スポーツフェスティバル」を行った。「ゆめ集会」では全校を縦割り班に分け、みんなでアクティビティをしながら交流し、自分の夢について語り、最後に全校生で1つの作品を作る。令和6年度は、人文字アートを作ってドローンで撮影をした。「TJAS スポーツフェスティバル」では、上級生と下級生がペアになって競技に参加し、全校で「だるまさんが転んだ」のギネス記録に挑戦し、見事新記録を達成した。

また、教員も小中関係なく合同で教育研究に取り組み、授業交流なども積極的に行っている。例えば、各教科の教科部会を小中合同で行い、お互いに情報共有をして自身の授業に活かしたり、小学校と中学



校の最高学年である小学6年生と中学3年生の担当の教員でミーティングを行い、学校のリーダーとなる児童生徒をどのように指導していくのかを話し合ったりしている。

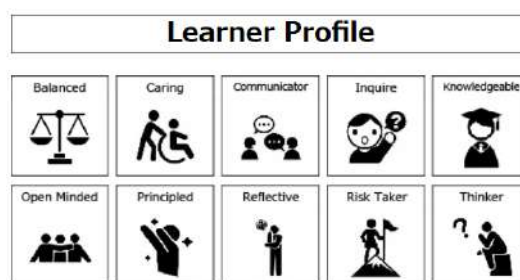
（２） シンガポールへの修学旅行

中学2年生の修学旅行は、シンガポールへ行き、市内の班行動や平和学習を行っている。特に生徒が楽しみにしているのが「B&Sプログラム」である。このプログラムでは、班行動を行う際、各班に地元シンガポールの大学生が1人ずつつき、生徒たちのサポートをしてくれる。会話は全て英語なので、生徒たちは今まで学んできた英語力やコミュニケーション力を発揮して大学生と交流し、大変素晴らしい経験をしている。また、地元の方との触れ合いもできるので、その国の人しか知らないような情報も教えてもらい、事後学習などに活かしている。



（３） 国際バカロレア教育（IB 教育）

バンコク日本人学校では、国際バカロレア教育（IB 教育）の要素を取り入れた教育を令和5年度から始めた。IB 教育とは、国際バカロレア機構が提供するプログラムで、グローバル化に対応できるスキルを身につけた人物を育成することを目的としている。近年では IB 認定校が日本でも増加し、高校入試や大学入試でも活用されている。バンコク日本人学校では、IB の概念的教育を参考にし、生活科や総合の授業で「見方・考え方がね」を活用して各学年のテーマに沿った教育を行っている。



国際バカロレア機構が設定した10の学習者像

4. 成果（派遣教員として得たもの）

バンコク日本人学校ではグローバル人材の育成を目標としていたため、自身の専門教科である外国語（英語）学習について多くのことを学ぶことができた。その1つが IB 教育やイマージョン教育など、今まで在籍した日本の学校ではやっていなかった英語に関する学習や教育方法である。日本の学校でもそれぞれの学習法の要素を少しずつ取り入れ、今後の教科指導に活かしていきたい。また、ネイティブの先生が常駐しており、授業方法や教科書も日本のものとは別のものを使用していたので、海外で行われている英語教育に触れることができた。文法指導中心ではなく、活動中心の授業を見学することができたので、これらを参考に生徒がより主体的に活動できる授業を目指していこうと思う。

登校支援についても考えることができた。海外では、学校と連携できる外部機関が十分でない場合があり、不登校生徒への対応は、学校中心で進めることがある。私が担当した学年にも学校へ登校することが難しい生徒がおり、その対応を学校と家庭で連携し、試行錯誤をしながら行った。そして3年間連携して進めたおかげで、最後には無事卒業式に参加し、進路も決定することができた。この経験を日本の登校支援にもつなげていきたいと考えている。

最後に、現地校との交流で、タイの教育について知ることができた。毎年各学年で交流会を実施しており、日本人学校の生徒がタイの現地校を訪れたり、タイの現地校の生徒が日本人学校へ来たりしている。私が参加した中学1年生の交流会では、日本の折り紙を紹介して一緒に鶴を折ったり、ソーラン節を一緒に踊ったりしたが、その交流の中でタイの中学生の現状や様子を見ることができた。また、教職員の研修会に参加し、タイの現地校へ行き学校の施設や授業を実際に見学し、説明会にも出席したことで、タイの教育についてより深く理解することができた。

この3年間、現地で生活をしながら勤務したからこそ学べたことが非常にたくさんあった。この素晴らしい経験を支えてくれた家族や周りの方々への感謝の気持ちを忘れずに、バンコクで得たものをこれからの教員生活でも活かしていきたい。

1 シンガポールの概観

シンガポールは東南アジアに位置する小さな都市国家で、面積は東京 23 区ほどの大きさしかないが、経済、治安、教育の面で非常に高い水準を誇っている。英語、中国語、マレー語、タミル語を公用語とする多民族国家であり、厳格な法律により街は清潔で治安も極めてよい。経済は貿易、金融、IT、観光などを軸に発展しており、港湾や空港の利便性も高く、アジアのハブ都市として機能している。マリーナベイ・サンズやセントーサ島などの観光地に加え、ホーカーセンターでは手頃な価格で多国籍料理が楽しめるなど、生活の快適さも魅力の一つである。

教育においては、独立直後から人材育成を最重要課題とし、識字率と就学率の向上を図っている。現在では学力水準が世界的にも高く、PISA でも常に上位にランクインしている。従来のテスト重視型の教育から、探究学習や創造的思考力を育む柔軟な教育への転換も進んでいる。英語を基盤としつつ、各民族の母語教育も重視されており、多文化・多言語環境での高い適応力が育まれている。

特徴的なのは、小学校修了時の全国試験によって中等教育の進路が決まる選抜制度が導入されており、大学進学だけでなく、ポリテクニックや専門学校といった多様な進路が確保されている。さらに、海外大学の誘致や留学生の受け入れなど、国際教育都市としての地位確立にも力を入れており、教育を国家戦略の中核と位置づけている。

このようにシンガポールは、厳格さと柔軟性、多文化共生と国際競争力を教育の中にバランスよく取り入れ、国家の成長を支える優れたモデルを実現している国である。



2 シンガポール日本人学校中学部の概要

シンガポール日本人学校中学部は、海外にある日本人学校の中でも比較的規模が大きく、各学年 5～6 クラスで編成されている。ただし、日本とは異なり、各クラスは 25 人程度で構成され、少人数教育を実現している。日本の文部科学省の学習指導要領に基づいた教育に加え、国際的な視野や多文化理解を育む特色ある教育実践が行われている。

シンガポールには、日本人学校の小学部が 2 校(チャンギとクレメンティ)があるが、中学部は本校 1 校だけである。つまり、中学部にはシンガポール中から日本人の生徒が集まっている。通学は遠い生徒で毎朝 1 時間から 1 時間半かかる生徒もいる。学校運営のバスに乗って通学する生徒もいれば、自力で公営のバスや電車を使って通学している生徒もいる。



3 特色ある教育実践

(1) 国際理解教育と多文化共生

シンガポールという多民族国家の環境を生かし、異文化理解・国際交流を重視した教育が行われている。現地校との交流や現地文化・歴史のフィールドワークを通じて、生徒が多様性に触れ、自国と他国の文化を比較しながら考える力を育てている。



(2) 英語教育の充実

日本の中学校以上に英語教育に力を入れており、「使える英語」を意識した実践的な授業が展開されている。ネイティブ教員による授業や英語でのプレゼンテーション活動も活発であり、生徒の英語運用能力の向上が期待されている。具体的には、通常のクラスでは技術を除く4教科の授業では、基本的には外国人教員が担当する。5教科に関しては、英語の授業のみ習熟度別クラス編成で、上位のクラスはネイティブ教員により英語でなされる。また、それだけではなく学年に1クラス「グローバルクラス」があり、選抜された生徒が所属している。ここでは国語と社会以外のすべての教科を現地人教員が英語で授業しており、CEFRでB2以上の英語力を持つ生徒が半数以上を占めている。「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」を目標として、イマージョン教育を目指している。



(3) ICT活用と探究的学び

ICTの活用が進んでおり、タブレット端末を使った協働学習やプレゼンテーション活動が日常的に行われている。また、課題発見・解決型の探究学習も積極的に導入されており、生徒は自ら問いを立て、調査・発表を行うことで思考力や表現力を高めている。

(4) 豊富な行事と体験型学習

学校行事や校外学習も重視されており、東南アジアの文化や自然を生かしたフィールドトリップ、宿泊行事が行われている。たとえば、1年次の校外学習ではマレーシア・ジョホールバル、2年次の修学旅行ではインドネシア・バリ島に行っている。こうした体験は、生徒にとって国際的視野や主体性を育てる貴重な機会となっている。

また、交流行事として、3日間シンガポールの地元の中学校と交換留学をする「星日交流プログラム」や、今年から新たに始まるラッフルズガールズスクールとの1週間の交換留学の制度がある。どのイベントも大変盛況で、あまり成績で可否を決めたくなかったが、相当優秀な生徒でないと参加できない。

(5) 安心できる生活指導と学習支援

海外であっても、日本と同様の生活指導体制が整っており、安心して学べる環境がある。学習面でも帰国後の受験や編入に対応した支援がなされており、日本の学校との接続にも配慮されている。進学先としては、帰国して日本の高校へ進学する生徒も多いが、現地には早稲田大学の系属校であり、渋谷教育学園グループによって設立された『早稲田渋谷シンガポール校』という進学先があり、日本の教育を継続できる体制が整っている。

(6) 特別支援教育の充実

シンガポールには日本人が多く、特別支援教育へのニーズも高まっていた。そうした背景から2023年度より本校では特別支援教育クラスを開設した。これは海外の日本人中学校として初めての試みであり、注目を集めている。このクラスは、シンガポールの国花であるランにちなみ、「オーキッドクラス」と名付けられている。

4 シンガポール日本人学校中学部で働いたことの成果

私はこの学校で担任を経験したほか、英語コーディネーターや国際理解担当としての業務にも携わった。特に大変だったのは、外国人教員との契約交渉や採用・面接といったコーディネーターとしての業務である。本校には10名の現地人教員がおり、彼らとのやり取りは多岐にわたった。特に採用の面接であったり、生徒指導で意見のすり合わせをするときは、本当に大変だった。また、コロナ禍で中断されていた現地校との交流を再開する際の調整も困難だった。これらの経験は、日本国内ではなかなか得られないものであり、自分にとって非常に貴重な財産となっている。今後はこれらの経験を、生徒や学校と共有しこれからの役に立ていきたい。

1. インドネシアの概観

在外派遣の合格と同時にわかった赴任先。インドネシアについて「赤道付近の暑い国？」とあまりイメージも知識もなかったが、3年の任期を終えた今、インドネシアの人々の、**陽気でニコニコ笑顔でフレンドリーな国民性**が大好きになった。日本の**平均年齢は 49.9 歳**、一方**インドネシアは 30.1 歳**とかなり若く、とても**活気に満ち溢れている**。また、日本語学習者が世界で**2 番目**であり、とても親日である。

人口	約 2.8 億人 （世界 4 位）
位置	東南アジア 北緯 6 度～南緯 11 度、東経 95 度～141 度 赤道直下
首都	ジャカルタ→ヌサンタラ （東カリマンタン州） 2045 年完成予定
宗教	イスラム教 87%、キリスト教約 10%、ヒンドゥー教約 1.7%、仏教約 0.7%
多民族国家	300 以上の民族集団（ジャワ人、スンダ人、マドゥラ人、バリ人など）

2. ジャカルタ日本人学校チカラン校の概要

チカラン地域は、大都会ジャカルタから車で約 1 時間東に位置する。牛が道路を歩いていたり、1 台のバイクに家族 5 人が乗って走ったりする風景も見られる、緑が多い街である。



インドネシア語や英語で、体育や家庭科、図工などを授業する**バイリンガル授業**など、多くの特色ある取り組みがある。授業に向けてインドネシア語と英語の先生と 3 人で**熱く語り合った時間は宝物**。

開校	2019 年 4 月
生徒数	小学部 206 人（学年につき 1、2 クラス）、中学部 40 名（1 クラスずつ）
職員数	教員 18 名、現地スタッフ 11 名
特色ある活動	縦割り活動、CJS フェスティバル、現地校交流、バイリンガル授業

3. 特色ある教育実践

国際理解教育の校務分掌を担当したため、現地校交流について紹介させて頂く。まだ開校したばかりで現地校との繋がりがなく、見つけるところからのスタート。交流に繋がるまで大変だったが、実際に顔を輝かせてコミュニケーションをとっている子供たちの表情を見た時は感動した。

まず、現地校の先生を運動会、CJS フェスティバル、English day などの行事に招待した。次に、夏休みや代休日を利用して、現地校の授業の様子を見学させて頂き、**授業後、教員同士でお互いの国の教育や授業について気になることを話し合った**。ヒジャブを巻いている生徒や先生達がいて、とても刺激的だった。また、学校の中に**6 つの宗教のお祈り用の部屋**がありとても驚いた。インドネシア国内の他の日本人学校とオンライン交流会をしたり、現地の幼稚園、インターナショナル校、技能実習生の学校、教育大学など、休みを活用して訪問し、意見交流を重ねたりした。

（1）現地校で日本の文化を伝授

代休日を利用して、同僚と現地校のインドネシアの生徒たちに、日本の授業を行った。3 年生に体育、4 年生にソーラン節と日本文化クイズ、中学生に数独の授業を行った。みんなとても積極的でリアクションが大きく、質疑応答では、沢山の質問をしてくれた。「なぜ、日本はインドネシアを攻撃したのか」という歴史に関する質問が来たときは、正直とても驚き、自国の歴史について知ることの重要性を痛感した。また、実際に体を使って学ぶことや、視覚教材を工夫すること、子供たちに前で見本を見せてもらうこと、小中の繋がりを意識することなど、共通して授業に活かせることはとても多かった。

(2) 子供たちの交流



互いに自己紹介をしてスタート。現地校からは、インドネシアの伝統スポーツ (Gobak sodor) を教えてもらった。最後に、練習してきていた歌を2曲、一緒に歌って、折り紙で作った名前入りのメダルをペアに渡して、記念撮影をした。4年生では、コマ回し、けん玉、福笑い、書道体験を行った。交流の実現に向けて模索していたが、想いをどんどん口に出して伝えてみることに、そして何よりも人の繋がりを大切にする事の重要性をつくづく感じた。

4. 成果

1年目・・・保護者の方と母語で繋がりたいと思い、全く話せない悔しさから、まずインドネシア語を猛勉強。秋の個人懇談では、やっと通訳の先生を介さず話せるようになり、インドネシア語で授業ができるようになった。クラスでは、漢字ノートやテストにインドネシア語の誉め言葉を活用したり、園和北小とオンラインで交流授業をしたりした。また、あらゆるイベントに自ら足を運んで、日系企業で働く方やインドネシアの方とスポーツ (パデル、マラソン、ムエタイ) や音楽 (ウクレレ、ピアノ) を通して出会い、ネットワークを広げた。

2年目・・・クラスでは、お誕生日のお祝いをインドネシアの歌でお祝いしたり、毎月外国語の歌を歌ったりした。また、1年目で出会った繋がりを生かし、孤児院や地域のイベントでピアノの演奏や、ダンスの発表を行った。

3年目・・・教育分野以外でも、インドネシア語を生かして自分が貢献できることはないかと思い、日経新聞で「日本とインドネシアに関するニュース」を探した。そして、「第1回アジア甲子園」「湘南ベルマーレ主催第1回日イスportsフェスティバル」がジャカルタで開催されることを知り、コンタクトを取って運営側として参加し、日本とインドネシアを繋ぐ貴重な経験ができた。

3年間で、改めて感じたことは、慣れない異国の地で全力で働くために必要なのは、何よりも健康管理。友達も家族も、知り合いが誰一人いない海外で過ごすことは、辛いこともあり、大変なことも多く、一人では生きていけないことを実感した。それと同時に、自分から話しかけたり、実際に行ってみたり、行動することで、出会いや経験が連鎖的にどんどん広がり、本当に楽しかった。また、英語以外の外国語を学ぶことの楽しさと相手の母語で繋がることの楽しさを知り、帰国後すぐに中国語の学習をスタート。春休みやゴールデンウィークには、他の国の日本人学校へ実際に訪問させて頂き、現地の日本人学校で働く先生と互いの国の教育事情について語り合った。今年の夏には、初のアフリカ大陸で、現地の小学校を訪問予定である。今後も、他の日本人学校で勤められた先生方と交流を深めたり、実際に現地の小学校へ行って感じたりしたことを子どもたちにどんどん伝えていきたい。日本に帰ってきてからも、観光地や駅など、あらゆる所でヒジャブを被った多くのインドネシアの方に出会い、自分が日本でできることが沢山あると感じている。今のクラスでも「先生、インドネシア語教えて」と毎日言いに来て、私を書いたメモをノートに貼りためている子がいる。漢字の書き順の話から広がった、韓国語や中国語の1～10、簡単な挨拶や誉め言葉も、いつの間にかクラスに浸透しており、改めて子供たちの吸収の早さを実感している。「日本は、やっぱりまだまだ英語が主流だよな」と勝手に思っていたが、制限することなくどんどん色々な話をして、子供たちの興味関心を広げることの大切さを実感した。

最後に、在外派遣の試験を受けるにあたり、応援して下さいった初任校の園和北小の先生方。コロナ明けて大変だった時期をインドネシアで共に乗り越えた全国から集った先生方。温かく迎えて下さった異動先の園田小学校の先生方。そして、海外で働くことを心配していたけれど、決断を理解し日本から支えてくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいである。今後は、尼崎の子供たちと共に、1度きりの人生、感謝の気持ちを忘れず、挑戦することを楽しみ、フルパワーで尽力していく。全ての出会いと経験に、terimakasih banyak! (テリマカシーバニャック! →本当にありがとうございました!)

バンクン教員養成校に赴任して～JICA ボランティアの活動を通して～

宝塚市立安倉小学校 山本佳奈

1. 赴任地の概観

(1) 赴任国ラオスについて

ラオスは東南アジアに位置し、中国・ベトナム・カンボジア・タイ・ミャンマーの五か国に接する自然豊かな内陸国である。仏教が国民の大多数の信仰であり、仏教に関連した行事も多いが、ラオ族をはじめとする約 50 の民族が住む多民族国家でもあるため、多様な文化が存在している。また、ラオスは 1965 年に世界で初めて海外協力隊が派遣された国でもあり、日本との関わりが深く、今年は日本とラオスの外交 70 周年及び協力隊派遣 60 周年を迎える。

(2) 赴任地バンクンについて

配属された地域は、ビエンチャン県トゥラコム郡のバンクンで、首都ビエンチャンから北に約 70km、バスを乗り継いで 2 時間ほどで着く、メコン川沿いの長閑な田舎町である。これといった観光地などは特になく、普段外国人や観光客の姿はあまり見かけない。しかし、メコン川のほとりから見える雄大な夕日や、道路を牛やヤギがゆったり闊歩する姿、人懐っこく親切なラオス人との交流など、ラオスならではの魅力が詰まった場所である。



2. 赴任校の概要



配属先は全国に 8 校ある教員養成校の一つで、幼児教育学部、小学校教育学部、英語 (ICT) 学部、ラオス語学部、自然科学部、数学部の全部で 6 学部を有する学校である。私が派遣された当時は、生徒総数 98 人、教員数 95 人であった。現在までに数学教育、理科教育、小学校教育の隊員の活動実績があり、JICA ボランティアの受け入れには当初から慣れていた。

近隣には附属の幼・小・中等教育学校もあり、養成校の教員が附属学校の教員を支援したり、児童生徒に向けて実際に授業をしたりすることもある。

また、公立校の長期休業期間を利用して、現職教員に向けての研修会なども行っており、スキルアップトレーニングを行う機関としての役割も担っている。近年、特にコロナ以降は学生数が激減し、実際私の配属された小学校教育学部には 2 年間学生がいなかった。教員を目指す学生の減少や、教職員の待遇と教育技術不足、少数民族や貧困家庭の子どもに対する教育の機会均等などはラオスの教育が抱える深刻な問題である。

3. 主な活動内容

ラオス政府は優先分野の一つとして、教育分野でも算数教育に対して積極的な取り組みを行っているが、依然として四則計算など児童生徒の基礎計算力は十分ではなく、配属先からも、算数に関する教材作製や、授業改善に関する支援を求められていた。具体的には以下の 4 つである。

- ① 教員養成校・附属小学校の算数授業への助言。
 - ② 児童生徒が算数に興味を持ち、積極的に取り組める授業づくりの提案や実施支援。
 - ③ 算数の理解を深めるための教材・教具の提案・作製。
 - ④ JICA 技術協力プロジェクトにより改訂された教科書の教授方法に関する支援。
- 加えて、児童の四則計算をはじめとする基礎計算力向上への支援も求められていた。

これらの要請内容と教員養成校の学生がいらないという現状を踏まえて、私が行った活動は主に以下の 4 つである。

（１） 附属小学校での授業支援

教員の指導が難しい場合の補助や、教員が出張などでいない場合の代替授業の実施を行った。現地教員が指導する場合には、理解が難しい児童への助言、ICT 機器（主にプロジェクター）の活用補助などを行った。プロジェクターは日本のEPSON から貸与されたものを使用し、授業の導入や復習時に活用した。特に図形やグラフ、表、統計、時計、大きな数などの学習には効果的であった。また、パワーポイント教材を作製・活用し、現地教員と協力して研究授業を行い、その作製方法についての研修会も実施した。ICT 機器を活用すると、児童の興味関心を高め、児童の理解や教員の説明を補助できる。イラストや具体物を指し示しながら授業を進められるので、児童の集中力が持続しやすい。教材準備の手間（図表を拡大したり、複数用意するなど）が省けるなど、メリットが多かった。



（２） 教材開発・作製

児童の興味関心をひくような教材や、児童の理解を促すような教材を作製し、その指導方法の提案を行った。また、児童の基礎的な計算力を高めるような教材づくりにも取り組んだ。ラオスでは講義形式のような一斉指導で、児童が板書をひたすらノートに写すような授業が多い。児童自身が楽しく学ぶ仕掛けを用意したり、具体物を操作させたりするような授業は少なかった。そのため、教材づくりと並行して、それを活用した授業の提案及び教職員への研修も重要であった。

（３） 教員への研修



配属先であるバンクン教員養成校の教員や、附属小学校教員への研修はもちろん、スキルアップトレーニングを受ける現職教員に向けても研修を行った。ラオスの算数教科書は JICA の技術プロジェクトが関わっているため、日本の算数教科書と似たようなつくりになっているが、その教科書を使い切れていない教員が多い。よって、それを活用した教授法の普及も大切になってくると感じた。また、ラオスで活動する他の JICA ボランティアと協力して合同研修会を実施したり、JICA の技術プロジェクトと連携した研修会・私立学校での研修会なども実施したりすることができた。

このように、様々な場所や機会で、実際に指導する現役教員の方々と共に学び合えたことは、私にとっても大きな学びとなった。

（４） 日本との繋がり

所属する小学校に向けてラオス通信を発行し、ラオスの文化や教育現場の様子を紹介したり、オンライン授業を実施したりした。また、JICA を通して依頼のあった学校で出前講座を行ったり、スタディーツアーのサポート、支援団体の活動補助なども行ったりした。ラオス人に向けては、日々の交流を通して日本をより深く知ってもらったり、ジャパンフェスなどで日本の文化を発信したりした。

４．成果（派遣教員として得たもの）

ボランティアというと、当初は自分が何かに貢献しなければ、役に立たなければと考えていたが、任地での活動を通して、実際には自分が助けられたり気づかされたりすることの方が多かった。ラオスの「ぼーぺんにゃん（大丈夫、気にしすぎない）」精神を見習って、何事も気負いすぎず、沢山の人々との助け合いを大切にし、全ての経験から得た学びを今後のキャリアに活かそうという心構えを学ぶことができた。帰国してボランティア活動が終わりというわけではなく、日本の子ども達や先生方にその経験を還元していくことも大切にしたい。ラオスでの活動や生活を通して、「それぞれの良さを認めて活かしていくこと」の重要性を改めて感じる事ができた。日本の当たり前がラオスの当たり前ではないし、自分の固定概念を見直すことで、日本やラオスそれぞれの良さに沢山気づくことができた。「それぞれの良さを認め、ともに学び合うことの大切さ」は今後の教育活動の中で子ども達にしっかり伝えていきたい。教員が日本と異なる環境で、試行錯誤しながらその国の方々と共に活動してきた経験は、子ども達の多様性を認め、子ども達自身の視野を広げることに繋がると考える。

1. 赴任地の概観

(1) ドイツ連邦共和国

- ドイツは「連邦共和国」で16の州から成り立っている。北緯は樺太と同程度で、真冬日もあり、冬は寒い、ハイツングというつけっぱなしのセントラルヒーティングが普及していて建物の中は温かく、冬の朝起きるのもつらくはない。北部の北海寄りには暖流のため温かく、南のアルプス山脈に近い方が冷え込む。空気は乾燥しており、雨がやむとすぐに道路は乾く。冬の日照時間が短く一年を通じて南中高度も低い、国民は初夏から積極的に水着や全裸で日光浴を行う。
- 車の4%がオープンカーで、冬以外は積極的にオープンにしている。
- 冬が長く寒いのか、冬の楽しみとして「クリスマスマルクト」が各都市で盛大に行われ、国外からも多数の観光客が訪れる。
- ビール工房は2000以上あり、ビールの種類は5000種有る。
ビールは保護者同伴なら14歳から飲める。また、ビール1本くらいならアルコールの呼気に引っかけられないので飲んで乗る人もいる。日中、路上や電車の中で瓶ビールを口飲みしている人もいる。缶ビールは見かけない。
- アルプス山脈以外、山はなく丘程度の平地が広がっている。街々に城壁があり、中世は外部からの攻撃に備えていた。
- アウトバーンが整備されているが、鉄道の整備が遅れ、ICEという新幹線もあるが専用線路の整備が遅れ遅延したり、欠便したりする。ミュンヘン中央駅は36番線まで存在する。列車やバスの中では、高齢者等に必ず席を譲る文化が根付いている。駅には改札がなく、近距離は回数券に乗る駅で打刻する。時折回ってくる「コントローラー」が検札し、違反すれば高額を支払いを命じられる。
- 自転車文化が発達しており自転車道が整備されている。歩行者も歩道に併設された自転車道に気をつけねばならず、接触事故も多い。小学校4年生に自転車の実習を含む授業が義務付けられ、合格証も発行される。
- 小売業は守られており、街にはたくさんの小売店がある。日曜日は原則休みのため、土曜日に食料品を買って補充しておく必要がある。
- 雇用者は守られており、2年間臨時雇用が続くと終身雇用にななければならない。病気休業も申請すれば受理せねばならない。欧州の中でも療養休暇はドイツが突出している。
- 拳手は手を挙げずに、人差し指一本を挙げる。これはナチスドイツの反省からである。ユダヤ人迫害の反省から、反ナチ教育は徹底しているようである。その反発から「ネオナチ」が台頭し始めているようである。
- 街には電柱や伝統の柱がなく（街灯はワイヤでつるし固定している。）整備されている。路上駐車は認められており、どこもびっしりと車が止まっている。シェアカーの制度が進んでおり、スマホで簡単に路上駐車シェアカーが利用できる。
- 日本人学校は、「ミュンヘン」（生徒数約170名）、「ベルリン」（約15名）「ハンブルク」（約50名）「フランクフルト」（約250名）「デュッセルドルフ」（約400名）の5校存在する。

(2) ミュンヘン

バイエルン州の州都で、BMW 本社・工場がある。BMW(Bayerische Motoren Werke)「バイエルン・エンジン・工場」という意味である。人口約165万人で、「田舎の街」の雰囲気治安も良い。落とした財布が返ってきたり、電車の中でも自然に席を譲ったりする習慣がある。イギリスがEUから脱退したことにつけ、いろんな企業がイギリスから本社移転等を行っている。ミュンヘンは地理的に欧州のへそのように中心にあり、今後もさらなる発展が見込まれる。9月～10月に行われるビールの祭典「オクトーバーフェスト」は世界中からの参加者でごった返す。1000人以上入る大型テントが10基以上建ち、ジェットコースターや観覧車等もその時期だけ設置されにぎわいを見せている。ダッハウ強制収容所跡も保存されている。

2. 赴任校の概要

- (1) 生徒数は、過去に最大 200 名を超えたこともあるが、2019 年からのコロナ禍で 150 名にまで落ち込んだ、それ以降徐々に回復し、2024 年度は 170 名まで回復した。数年かけ 200 名超になる見込み。小学部 5 年生以上なら自力通学可能で、一人でバスや地下鉄を利用して登下校している。
- (2) 創立 1994 年、当時の日本人会や企業等が中心となり、バイエルン州の認可も得て、創立した。間借校舎から、2004 年に現在地に移転、広くはないが閑静な場所で、道路も袋小路のため交通量も少ない。芝生の中庭で、グラウンドはないが、徒歩数分の公共グラウンドを借りて体育の授業を行っている。地下体育館を備えている。校舎の床はアンモナイト等の化石が入った石でできている。
- (3) 学費 330€/月 (2024 年度より 460€に値上げ)、入学金 50€。年間収入授業料約 1 億円 (330 €、1€/160 円換算)。州からの補助約 1 億 5 千万円。
2024 年度は創立 30 周年。式典、記念し、記念コンサート、等周年行事を行う。
- (4) 「ヤーパンフェスト」7 月第 3 日曜日に行う日本人会・独日協会・総領事館共催の行事で数千人が「英国庭園」へ集う。本校からは書道ワークショップ、図工展、舞台でのエイサー披露 (小 6) 等を行い協力している。
- (5) 「日本人会バザー」日本人会主催で 11 月上旬、本校で開催。保護者児童生徒のボランティア、各種関係団体が参加していて千人以上の来場者がある。

3. 特色有る教育実践

- (1) MT (ミュンヘンタイム)
「ミュンヘンを知ろう」というコンセプトのもと、「いちご狩り」(小 1)「近所の小売店でプレッチェルを買う。」(小 2)、「動物園写生」(小 3)、「浄水場見学」(小 4)、「BMW 工場見学」(小 5)、「ホップ工場見学」(小 5)、「オペラハウス見学」(小 6)、「化石掘り」(小 6)、「ミュンヘンラリー」(中学部)「現地校との訪問交流・来校交流」(各学年) 等が有り、現地採用ドイツ人教職員も参加し、校外学習を行っている。
- (2) ドイツ語
「ミュンヘン日本人国際学校」の由縁といえる州からの認可を受け、ドイツ語の授業もカリキュラムに組み込んでいる。1～2 学年で、習熟度により、5 名のドイツ人教師の部屋へ出向き授業を受けている。
- (3) 現地校との交流、英会話、修学旅行中ベルリン、ザルツブルグ
○現地校との交流も積極的に行われている。ドイツの学校ではおやつを食べる習慣があり、交流に行ってもおやつタイムがある。来校交流の時も現地に習慣に合わせおやつを準備している。来校交流では、「独楽回し」「お手玉」「羽子板」「福笑い」「餅つき」「あやとり」「剣玉」「書道」等、日本の伝統的な遊びや文化を披露している。
○英会話も英語の授業とは別に、学年ごとに習 1～2 時間程度英語を母国語とする現地採用教員が主となり行っている。
○修学旅行は小学部オーストリア国境越えてすぐの「ザルツブルク」、中学部「ベルリン」へ行き自然や、東西分断時代の歴史等を学習している。

4. 成果

- (1) 学校として
○件のごとく、地理的・時代的に有利な状況にあるため生徒数の増加が見込まれることと、州の認可を受けていることで補助金が下り、経済的に潤沢な予算があるが、州からの認可を受けている故に、「特別支援学級」を作れないという状況にあり、ボーダーの生徒も増えている状況の中、人的要因をどれだけ配置できるかが今後の課題である。
- (2) 教頭として
○HP に俳句をちりばめ、今後入学する家庭や在校生保護者に安心感・安堵感をあたえ、アットホームな雰囲気を作り上げた。
○総領事館、日本人会、保護者会等との連携を密にとり、「チーム国際校」を構築した。

1 赴任地の概観

台湾とは、東アジア太平洋の島（台湾島）、およびそれを中心とした地域であり、中華民国といわれている。また、フォルモサ（ポルトガル語：美しい島）という別称がある。人口は約2,342万人で、台湾原住民の他、漢民族系の民族など多民族が共生する地域となっている。

首都は台北（Taipei）で台湾最大の都市。台湾北部、台北盆地の中央部に位置し、政治、経済、文化の中心地として重要な役割を果たしている。



2 赴任校の概要

台北日本人学校は、台北市内の北北東・天母（テンム）地区にあり、その設立は昭和22年開校に遡り、戦後はじめて開設された歴史と伝統のある日本人学校である。

学級数は小学部21学級、中学部6学級、特別支援学級1学級、合計28学級の小中一貫校となっている。教職員は文部科学省派遣教員34名、現地採用教員28名（非常勤職員含む）計62名が授業を担当し、学校秘書1名と事務長はじめ事務職員7名の総計69名の人員で学校運営にあたり、世界の日本人学校の中でも、有数の大規模校として位置付けられている。（令和6年度学校要覧より抜粋）



また、2021（令和3）年度より新校舎となり、新しく綺麗なだけでなく、グラウンド（運動場）含め教育活動が行われている敷地内にWi-Fiが完備されている。アリーナ（体育館）にはBluetoothで繋ぐことができる音響設備があり、室内プールには自動で塩素濃度を調節できる機能が付いている。児童生徒に人気のメディアセンター（図書室）や、地下で活動ができ避難場所にもなっている多目的ホール、ドッジボールができるラバーコート、テニスコートなども備わっている。児童生徒にとっても教職員にとっても大変便利なものに溢れ、多様な選択をしながら学習ができる環境下にある学校である。

3 特色ある教育実践

(1) 外国語教育

① 英語活動

小学1年生から中学3年生まで週1時間（小学校中学年は週2時間）を英語活動の時間としている。外国人教師を含めた合計5名が、1つの学級を3コースに分け少人数で授業を実施している。児童生徒のレベルに応じて英会話中心の授業となる。小学校低学年では10月末にハロウィンに関する特別授業が行われ、児童はコスチュームを着て授業を受けることができたり、小学校中学年は一室にカフェショップを開き、児童がカフェ店員、教員がゲストとなりオールイングリッシュで応対するなどしたりとどの学年も工夫を凝らしたユニークな授業が展開されている。

② 中国語活動

台湾では中国語（台湾華語）が話され、本校でも国際家庭の児童生徒が多数在籍しているため、全学年で中国語の授業がある。4月最初の授業でクラス分けテストが行われ、習熟度別授業が始まる。また、現地理解を深めるため、言語だけでなく台湾の季節行事についても学習している。

(2) 現地（国際）理解教育

現地校（台湾の学校）との交流がある。小学校低学年は士東國小、小学校中学年は薇閣國小、小学校高学年は天母國小、中学部は天母國中とどの学年も交流を行っている。交流の中で本校児童と現地校児童に向けた授業を行ったり、現地校の先生方との交流を深めたりした。

他にも、現地のお茶摘み体験（小学3年生）や客家テレビ局見学（小学5年生）などの校外学習や、修学旅行等で現地の文化体験も行っている。

(3) ICT 教育

学校敷地内どこからでもストレスなくインターネットにアクセスができる環境にある。タブレット端末を使用することで場所や空間を選ばない授業内容の幅が広がっている。全校児童生徒に1人1台のICT端末（小学1年生～小学3年生はiPad、小学4年生以上はChromebook）を貸与し、全教室に設置されたプロジェクタを活用したり、Google Workspace 以外にもロイロノートや電子書籍のMottoSokkaなどを活用したりして授業内容や成果を共有、発表し、ICT機器を活用した主体的で対話を伴う学習に取り組んでいる。また、教員には1台のPC（主要教科のデジタル教科書をインストール可）の他、1台iPadが貸与される。

(4) 台北日本語授業校

台北日本人学校とは別に、日本にルーツをもつ現地校に通う子ども達に、日本語での学習活動をしている組織がある。授業校に通う子どもの保護者が中心となり各学年およそ10名前後で毎週土曜日の10時から12時まで、主に光村図書の教科書を使用し国語の授業をされている。この子ども達に向けて派遣教員は普段の授業力を生かし、年1～2回ボランティアで授業を行い、保護者に対しても授業に関するアドバイスをしたり相談に乗ったりしている。

4 成果（派遣教員として得たもの）

派遣されてからすぐに、3年目の派遣教員から「教材開発を一緒にしませんか？」と声をかけられた。教材の内容は台湾の民主化に貢献した李登輝元総統を題材にした道徳の副読本である。李登輝元総統の元日本人秘書である早川氏を紹介していただき、教材開発に携わった。

派遣2年目には既存の宿泊学習場が使えないことが分かり、現地採用教員の副担任に協力してもらいながら宿泊学習の新規開拓を行った。他にも、スポーツフェスティバル（小中合同運動会）担当として、全国から集まった様々な考えをもった小学校・中学校の教員と何度も打ち合わせを行ったり、中学部と関わりながら開催に向けて準備を進めたりする機会も得られた。

初めてのことが苦手な私にとって、初めてづくしの貴重な経験ばかりであった。また、派遣途中でコロナ禍が落ち着いたことで、従来の行事などの教育活動一つ一つが児童生徒にとって本当に必要なものなのか？負担になっていないか？などを学校全体で考え議論をしながら見直していった。私自身の教育に対する考え等がブラッシュアップされ、より豊かになったと実感している。人にも環境にも恵まれた3年間であった。得られたものをこれからの教員人生に生かしていきたい。



1. 赴任地（チェコ）の概要

チェコ共和国は中央ヨーロッパに位置し、ドイツ、オーストリア、ポーランド、スロバキアと接する内陸国で、山脈や高原といった自然地形が国境を形作っている。国土面積は約 78,864km²、人口は約 1,000 万人。ボヘミア・モラヴィア・シレジアの 3 つの地域から成り、首都はプラハ（Praha）で、人口は約 130 万人を数える。プラハは「百塔の町」とも称される歴史と芸術の都であり、建築・音楽・絵画など多くの分野で世界的な文化遺産を有する。スメタナ、ドヴォルザークといった作曲家を輩出し、画家アルフオンス・ミュシャもこの地で活躍した。市内ではオペラやクラシックコンサートが日常的に開催され、芸術の薫りに包まれている。1989 年の民主化運動「ビロード革命」以降、日本との経済的な関係も深まり、近年は和食レストランや日本食材店も増えている。プラハから車で東へ約 1 時間のコリン（Kolin）にはトヨタ出資の TMMCZ 工場があり、約 4,000 人の従業員が日々 1,000 台の車（Yaris, AygoX）を生産し、ヨーロッパ各地へ輸出している。さらに、ロシアのウクライナ侵攻を受け、チェコは人口比で EU 最多となる約 36 万人のウクライナ難民を受け入れ、教育や福祉、雇用支援の現場でも国を挙げた取り組みが進められている。自然豊かなチェコでは、春から秋にかけて多くの市民が家族でハイキングやキャンプを楽しみ、冬には山岳地帯でスキーやウィンタースポーツに親しむ文化が根づいている。ビールの一人あたり消費量は世界一であり、ホップや麦芽は日本にも多く輸出されている。世界的に有名なビール「ピルスナー・ウルケル」はアサヒビールによって日本でも広く販売されている。

2. プラハ日本人学校の概要

1980 年に開校したプラハ日本人学校は、何度か借用校舎を移転した後、2004 年に現在のジェピ（Řepý）の校舎に落ち着き現在に至っている。現在は 90 名程度の数で推移している（約 2 割～3 割が中学部在籍で、残りは小学部）。近年は、管理職を含め 12 名の派遣教員と 3 名の現地採用教員、1 名の事務員と数名の現地採用の用務員・清掃員という構成で運営されている。校舎サイズは大きくはないが、学年ごとの教室に加え、充実した書籍数を誇る図書室をはじめ、図工室・音楽室・技術室・調理室に体育館・グラウンドという児童生徒の活動に必要な基本的な設備がある。

3. 特色ある教育実践（ヴェリヒ校との交流）

様々な教育実践の中から、筆者がコーディネートを担当した現地校との交流について取り上げる。国際交流学習の観点から、最も身近でありこれまでも約 20 年にわたって継続して交流してきた（コロナ禍では一旦交流は途絶えていた）現地の公立小中学校ヴェリヒ校と、双方にとって無理がなく互恵的な関係を築き、学習活動を進めていくことを目的に交流を進めた。大切にすることは以下の 2 点である。

- ・事前に日本側で全体計画を細かく立ててしまうのではなく、毎年双方の渉外担当教員・通訳の先生の 3 者で顔を合わせて、それぞれの関心を出し合いながら、毎年計画を立てていく。
- ・学校間のコミュニケーションの中で生まれる発想やアイデア、思いを大切にしながらプログラム化していく。

下記のスケジュールのように、1 回きりの交流ではなく、何度も交流を重ねていくスタイルをとっている。計画ありきではなく、交流を重ねるごとに話し合い、その中で新しくアイデアが生まれ、実現していった。

【実際の交流スケジュール】 黒字:継続交流 赤字:今年度新規 青地:今年度新規 (チャレンジ)

	会場：ヴェリヒ校	会場：ブラハ日本人学校
4 月	・【ブラハ日本人学校教員向け】学校見学・職員研修（授業見学、意見交換）	
6 月	【ブラハ校教員・ヴェリヒ校教員合同打ち合わせ】→次年度の見通しを組み立てる	
8 月		【ヴェリヒ校教員向け】学校見学・職員研修（授業・そうじ見学、意見交換）
9 月	【ブラハ校4・5年向け】ヴェリヒ校主催交流プログラム 【ブラハ校中学部・ヴェリヒ校合同】ソフトボール試合 【ヴェリヒ校エコスクール向け】ブラハ校4年生総合「お風呂文化」の紹介（ヴェリヒ校エコスクールのテーマ「水」に関係）	
10 月		【ヴェリヒ校教員向け】学習発表会への招待
11 月	・クリスマス点灯式への有志の参加（教職員、下校後の小学部、家庭）	【ヴェリヒ校1・2年生向け】「秋のフェスティバル」（ブラハ日本人学校1・2年企画） 【ヴェリヒ校4・5年生向け】「日本文化祭」（ブラハ日本人学校4・5年企画） 【ブラハ校5・6年向け】ヴェリヒ校教員による演劇ワークショップ
12 月	【ブラハ校3年ヴェリヒ校中学部？合同】クリスマスツッキー作り	
2 月	【ブラハ校1，2年向け】オープンスクールへの招待	【ブラハ校5年ヴェリヒ校5年】劇の相互交流 ヴェリヒ演劇チーム4，5人+教員2人 日本人学校「ゴレム」ヴェリヒ校「大岡越前」



日本とチェコのお風呂文化の違いについて日本の子ども達が劇で発表



お互いの学校に招きあって、文化を紹介し合う

4. 成果（派遣教員として得たもの）

ヴェリヒ校側の交流担当のフィリップ先生は、筆者の帰国にあたって、送別会を企画してくださった。何杯もビールを飲みながら、別れを惜しんでくださった。その国の文化を尊重しながら関係を築いていくことの大切さを実感せずにはいられなかった。

日本では当初の計画が重視されるが、チェコではその場のコミュニケーションが重視される。その場で「そのアイデアいいね！」となれば、計画になくとも実現に向けて積極的に動き出す。それに同僚も含めて戸惑いもあったが、チェコならではの醍醐味とも感じた。

その場だからこそできる、“旬の学習”をこれからも子ども達と作っていきたい。そのためにも、子ども達と中心に、学校に関わる様々な関係者とコミュニケーションを取り、人々の思いが乗ったカリキュラム、教育課程を作っていく必要がある。国や文化が異なっても、コミュニケーションを大切に、互いの思いを重ねていくことで、私たちだからこそできる教育活動を創造できたことが何よりの成果である。



筆者とヴェリヒ校のフィリップ先生と

マレーシア ジョホール日本人学校に赴任して

姫路市立古知小学校 中川 英毅

1. 赴任地の概観

マレーシアは東南アジアに位置する多民族・多文化国家で、首都はクアラルンプールである。国土はマレー半島とボルネオ島北部の2つに分かれており、豊かな自然と多様な文化が共存している。国土面積は約33万平方キロメートルで、日本の約9割ほどの大きさである。

人口は約3300万人で、主にマレー系、中華系、インド系の人々から成り立っている。このような民族構成から、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教など、さまざまな宗教が共存している。公用語はマレー語であるが、英語や中国語、タミル語も広く使われている。

経済面では、天然資源（石油、天然ガス、パーム油など）に加えて、近年は製造業や観光業、IT産業が成長している。特に首都クアラルンプールの都市開発は著しく、高層ビルやショッピングモールが立ち並び、近代的な都市景観を形作っている。

一方で、豊かな熱帯雨林や美しいビーチ、世界的に有名なダイビングスポットなど、自然の魅力もあふれており、世界中から多くの観光客を引き付けている。また、多様な食文化もマレーシアの魅力の一つで、マレー料理、中華料理、インド料理などが融合した独特の料理も楽しめる。

マレーシアは多様性と調和を特色とする国であり、経済・文化・自然の面で多くの魅力を備えている国である。

2. 赴任校の概要

赴任したジョホール日本人学校はマレーシアの最南端に位置するジョホール州にある。国境の橋を渡ればすぐシンガポールである。学校は1997年に開校し、ジョホールバルの中心地から北東約25Km離れたスリアラム開発地域内にあり、静かで学習に適した環境にある。

20,238㎡の敷地内に校舎、体育館、プール、運動場等の施設・設備を有する小中併設学校である。敷地内にはマンゴーやバナナなどの熱帯の果物があり、とても緑の豊かな学校である。私が赴任している期間は全校児童生徒を合わせて60人前後で推移していたが、2025年度は70人にまで増えているようである。しかしクアラルンプールやペナンの日本人学校に比べると規模がとても小さく、アットホームな学校である。全校児童生徒と教員で温かくそして心地よい雰囲気を作り上げてきた学校のように感じる。



3. 特色ある教育実践

(1) 「マレーシア文化の日」(現地校交流)

多くの日本人学校で行われている現地校交流。マレーシアは多文化国家なので現地校も様々である。ジョホール日本人学校では現地校交流を「マレーシア文化の日」として、1年でマレー系、中華系、インド系の学校と交流を行った。1年で3つの文化と触れ合い、理解を深めることは大切であるが、毎年学校の選定や調整には担当は苦労していた。しかし、子どもたちにとっては日本では絶対に経験することがないようなことを経験させることができた。民族ごとに学校の様子や授業の内容が大きく違うことに驚かされた。事務職員や現地スタッフの力を借りながら充実した現地校交流が行えた。



(2) 「日本文化の日」

日本文化の発信拠点として日本文化を紹介する日を設けた。私が赴任した年から行われたのでまだ3回の歴史しかない。どうすれば子ども達が日本文化を積極的に紹介できるか、マレーシアの方とど

う交流できるかを考えて計画が立てられた。現地校（6つの小中学校）の児童生徒を招待し、教職員を含め80名ほどが参加してもらえた。低・中・高学年と中学部で4つのブースを設け、低学年ブースでは折り紙やコマ回し、中学年ブースでは福笑いやけん玉、高学年ブースではペン習字、中学部ブースではお茶を体験してもらった。内容は年度によって変わっていたが、どのブースでも日本の文化を伝えたいという気持ちでマレーシアの方に体験をしてもらっていた。また令和6年度の「日本文化の日」には日本文化を伝えるブースに加え、日本の四季の歌を披露することができた。現地の方に日本の魅力を伝えられるよい機会となった。



（3）英語学習の取り組み

現地採用の講師3名が行う英語の授業は小学部1年生から中学部3年まですべての学年で実施している。能力別に3つのクラスに分けており、少人数で授業を行っていた。ストーリーテリングコンテストやヘナタトゥー体験、クリスマスショータイムなど講師と外国語担当が連携し、充実した学習になっていた。毎年、学校評価では「もっと英語をしゃべる機会を与えてほしい。」「英語の力が伸びていない。」などの意見もいくつか見られた。保護者の英語教育に対する熱量は日本に比べるとかなり高いものを感じる。

（4）和太鼓部

コロナ禍では来校に制限がかかっていたので日本人学校の教員が指導していたが、それまでは日本人会の有志の方が指導に来てくださっていたようだ。コロナが収まり2024年度からは和太鼓部は日本人会が運営する形に戻った。日本人学校の児童生徒の多くが在籍し、多くのイベントに参加する機会があった。マレーシアはよさこいやソーラン節など日本の踊りがとても人気があり、日本人学校の児童生徒が出演する演目にはたくさんの現地の方が集まっていた。



4. 成果（派遣教員として得たもの）

（1）選ばれる学校へ

保護者の日本人学校に対しての思いは大変強いものがある。保護者のニーズにある程度応えないと入学者、編入者は少なくなるだろう。今までホームページなど作ったことがなかった自分が、日々の学校の様子をブログにアップし、ホームページで魅力を伝えてきた。2025年度から業者がホームページの基を作り、各職員が簡単に日々の様子をアップロードできるようになったことはありがたかった。日本人学校だからできる活動、日本人学校しかできない活動を中心に発信することができた。日本でも魅力ある学校を作り、保護者から行かせてよかった学校だと思われる必要がある。

（2）柔軟な考え方

全国から集まった先生方と一緒に働くことで、さまざまな考え方に触れることができた。特に中学部の先生方の考え方に触れたことで小中9年のゴールの具体の姿が見ることができた。海外で頑張っている子ども達のために何ができるか先生方でよく議論をしてきた。小中連携の必要性をより感じた3年間であった。

（3）挑戦する姿勢

今の日本ではチャレンジしにくい環境なのかもしれない。できるかできないかではなく、やるかやらないか。成功や失敗よりも、行動する大切さを感じている。日本の国力はずいぶんと低下し、このまま日本が沈没してしまうのではないかと感じるくらいである。失敗してもくじけず、行動していく大切さを子ども達に伝えていきたい。

広州日本人学校に赴任して ～ICT インフラで学校の課題解決～

加西市立北条東小学校 兵藤大輔

1. 中国広州の概要

中国南部の広東省省都である広州市は、香港や深圳に近接する国家戦略上の要衝であり、急速な経済発展を遂げている大都市である。AI や EV など先端分野での産業集積が進む一方、教育分野でもプログラミング教育や AI 教材の導入など、ICT を活用した先進的な学習環境が整備されている。また広州は、日本企業にとっても、重要な製造・輸出拠点であり、特に自動車や電子機器分野を中心に多くの企業が進出している。

2. 広州日本人学校の概要

2025 年に創立 30 周年を迎える広州日本人学校は、現在約 400 名の児童生徒が在籍する大規模な在外教育施設である。郊外に広がる敷地には、体育館、屋内プール、人工芝グラウンドなどの充実した教育環境が整っている。教育目標には「自ら学び、個性豊かに国際社会に生きる児童・生徒の育成」を掲げ、5 つの「つながり」（教師・授業・子ども同士・保護者や日本人社会・中国）を大切にしながら教育を推進している。



3. 特色ある教育実践

「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体力」「信頼される学校づくり」の 4 本柱を中心に、子どもの実態や学力調査、学校評価の結果などを分析しながら教育を展開している。そのうちの 2 つを紹介する。

(1) 確かな学力

- (ア) 校内研修や授業研究、研究通信を通じて授業力向上を図り、ICT を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実践している。
- (イ) 英語（週 2 コマ）や中国語（週 1 コマ）による語学教育にも力を入れている。



(2) 豊かな心

- (ア) 現地校や学校スタッフさんとの交流を通して国際理解を深めている。
- (イ) 出前授業や職場体験を行い、働く方の話を直に聞いたり実際に働いたりすることでキャリア教育につなげている。
- (ウ) 小中合同で行事や授業での交流を行い、多様な価値観を育む活動を展開している。



4. ICT の課題と ICT インフラ対策

着任当初は、「情報活用の煩雑さ」「ICT 環境の未整備」「情報教育の未確立」という 3 つの課題があった。情報共有の面では、SNS やサーバ、クラウドに情報が分散し、教職員間の伝達に混乱が生じていた。また ICT 機器は貸出タブレットに依存、情報教育も学習指導要領の移行とコロナ禍による対応の遅れが見られた。

そこで Microsoft Teams を導入し、チャネルの整理や研修の実施し、SharePoint によるマニュアル整備など、情報の一元管理体制を構築した。Teams で情報を一元化することで、予定やタスク、時間割やアンケート結果など様々な情報を共有しやすくなり、情報を手軽かつ正確に共有することが可能となった。また授業の実践や悩みなどもチャットを活用することで、お互いの学びや授業についての会話のきっかけが生まれた。



ICT 環境においては、2 年かけて一人一台端末やデジタル教科書、電子黒板、学習アプリ、クラウド型の校務支援ソフトを導入し、学習環境の質を高めた。中国は規制が厳しいため近隣の日本人学校と情報交換をしながら最適なものを選択した。

情報教育では、カリキュラムを統一し、教員の ICT 活用スキル向上を図ることで、授業改善と児童の情報リテラシーの向上が図られた。

5. 成果と今後の課題

現地で担任や教務主任をしながらの ICT インフラ整備には、非常に多くの困難と壁があった。しかし、教職員や近隣の日本人学校、現地の企業と協力することで以前よりも前進することができた。その結果、業務効率が向上。子どもや授業と向き合う時間を確保することができた。また ICT を活用した授業改善も進み、全国学力状況調査では日本平均を大きく上回る成果を得ることができた。

一方で、今後の課題として、やはり専門的知識をもつ ICT 担当者（SE）の確保と MEXBIT との連携体制の整備が必要である。日本では教育委員会を中心に ICT 教育やインフラ整備が急速に進んでいるが、日本人学校との格差も広がっている。MEXBIT においては日本人学校は対象外である。日本と同等の教育を行う上ためには、これら 2 点の整備が急務であると考えます。

6. 派遣教員として得たもの

中国での勤務期間は、コロナ禍や社会情勢の影響など想定外の事態が相次ぎ「自分たちで判断し、解決しなければならない状況」が多くあった。それら一つ一つの課題に対して、教職員それぞれの多様な視点に触れながら、共によりよい学校づくりを模索した日々は私にとってかけがえのない財産となった。子どもの命を守る重大な責任と限られた予算で学校運営を行う難しさに直面し、在外教育ならではの課題に対して、より深く考え、広く学ぶ機会を得ることができた。

また企業や領事館との連携を通して、地域社会とつながる学校の在り方を学ぶこともできた。これまで「開かれた学校」という言葉は耳にしていたものの、実際に多様な社会や人とのつながりを子どもたちに実感させることが、子どもの未来を切り拓く力になるということを実感した。

帰国後は、以前にも増して「学校課題の発見と解決」の視点を大切にするようになった。学校が抱える課題は何か、子どもの問題行動の背景には何があるのか、どうすれば解決できるのか——こうした課題発見と課題解決の思考と行動力が身についたことはこの派遣で得た最大の学びであると感じている。

今後は、ICT の整備だけでなく、教育の本質である「人と人とのつながり」「授業の質」を大切にしながら、加西市の教育に貢献していきたい。

1. 赴任地（香港）の概要

香港は、東京の南西 2900Km、中国広東省の南、南シナ海に面している中国の特別行政区である。面積は 1110 km²で沖縄県の約半分である。しかし、その面積に対して人口は約 753 万人（2023 年）と非常に多く、人口密度が高い。人口の 92%が中国人で、残りはフィリピン人やインドネシア人、英国人などで構成されている。在留日本人は約 2 万 3000 人ほどである。香港は亜熱帯気候に属しており高温多湿で、年間を通して温暖である。香港の人々の生活用語は広東語であるが、ほとんどの場所で英語も通じる。香港は電車、バス、トラムなどの交通手段が発達していて、車が無くても十分生活できる。時刻表のようなものは無く、一定の間隔で次の便が来るのだが、待ち時間が非常に少なく、電車であれば 4～5 分ほどである。また、タクシーも比較的安価で利用することができる



2. 赴任校（香港日本人学校大埔校）の概要

香港日本人学校は、「香港校」と「大埔校」の 2 校ある。私が赴任したのは「大埔校」である。学校は、香港の中心街から離れた大埔自然保護区に面し、緑豊かで穏やかな海を眺める高台にある。同じ校舎の中に、英語で授業を行う IS（インターナショナルセクション）を併設している。学校として、特に力を入れているのが英語教育である。全学年週 5 時間英語の授業があり、習熟度ごとにクラス分けがされ、ネイティブの外国人によるオールイングリッシュでの授業が行われる。また、図工科と水泳の学習も英語によるイマージョン教育が行われている。そのため、英語に関する行事が大々的に行われ、ハロウィンやクリスマスなどの海外由来の行事にも学校全体として取り組む。英語の授業だけでなく日本型学力の伸長にも力を入れており、算数の授業での少人数指導を行ったり、タブレットを活用して個別最適な学びを行ったりしている。また、香港に進出している日本企業の全面的なバックアップのもと、出前授業の講師をしていただいたり、校外学習の訪問先として企業を訪れたりしている。



3. 特色ある教育実践

（1）現地の学校との交流

毎年、現地の学校と交流会を行っている。交流会では、互いの文化や言葉を教え合ったり、ゲームやワークショップを行ったりしている。私が交流した際には、日本の伝統的な昔遊び（けん玉やこまなど）の遊び方を教え、一緒に楽しんだ。互いに意思疎通を行うには英語でのコミュニケーションが必要である。なかには英語が思うように話せない児童もいるが、時間が経つにつれ、表情や身振り手振りで意思疎通を行う姿が多く見られた。交流会は、互いの文化を知ることができるとても有意義な時間である。

（2）日本の学校とのオンライン交流

教員が所属している日本の現任校や以前日本人学校に勤務していた教員の現任校などと学校の壁を越え、オンラインで交流を行う。交流の内容は学年によって様々であるが、香港の紹介や学校の紹介を行うことが多い。また、大埔校が英語教育に力を入れているということもあり、日本の学校が外国語の学習の時間を利用して、英語を使用した交流を行う学年もあった。交流は学期に 1 回など定期的に行い、互いの学校紹介や質問を全体での発

表という形で行ったり、グループに分かれオンラインでも交流できる活動をしたりした。画面越しではあるが、他者を意識して取り組むことで、児童が意欲的に授業に取り組む姿が多く見られた。

(3) 日本企業による出前授業

香港には多くの日本企業が進出している。その企業の全面的なバックアップのもと出前授業の講師をお願いしている。実際に行った出前授業を2つ紹介する。1つ目は、航空会社の方による、飛行機の仕組みや、航空業界の仕事に関する授業である。パイロット、キャビンアテンダント、整備士、グラウンドスタッフの方々に来ていただき、仕事の内容や仕事をする際に大切にしている事などを教えてもらった。2つ目は、銀行の方によるお金に関する授業である。日本で新札が発行されたタイミングで、銀行の方にお金に関する基本的な知識を教わった。他にも、多くの日本企業の協力を得て出前授業を行ってもらっている。

(4) 大埔だ班活動

大埔だ班とは、縦割り班による異学年交流のことである。年間を通して交流活動があり、班の高学年が中心となって交流の内容を計画する。年に1回、全校遠足という学校行事を行う際には、この縦割り班で行う。班の構成は、1年生から6年生までの約20人程度である。グループをまとめるために奮闘している高学年の姿、またその姿に憧れる中学年の姿、優しくしてもらえて嬉しそうな低学年の姿が見られ、児童の自主性や協調性が大きく成長する活動である。



現地の学校との交流会

4. 成果（派遣教員として得たもの）

1年目はコロナ禍から始まり、学習活動にも様々な制限があった。しかし、その制限がある中でも児童の学びを深めるために行える活動を工夫することで、貴重な経験を積むことができた。その1つがICT機器の活用である。対面で授業が行えない時に、オンラインで授業を行ったり、行事の様子をオンラインで保護者向けに配信したりとICT機器を使う機会が多くあった。その経験から、ICT機器をより効果的に使用した授業を行う技術が高まったと感じている。

また、在外教育施設ということから、日本で教師をしている時以上に日本企業からのサポートを強く感じた。香港で働く多くの日本人の方と関わらせていただき、日本人学校は多くの方からの期待を担っている事が分かった。しかし、香港日本人学校の児童数は年々減少してきているという現状がある。その要因を探している中で、日本人学校ではなく現地のインターナショナルスクールに通っている日本人も少なくないということが分かった。選ばれる日本人学校になるために学校の特色を作り、それを魅力として外部にPRしていくことの大切さを学んだ。同僚の先生と一緒に学校の特色について考える中で、各々が各都道府県で実践してきたことを共有することができ、とても多くの学びがあった。

日本の外に出て、日本で受けられる教育が「当たり前」ではないと気付くことができた。そのことは、私の教師人生において、とても大きな財産となった。香港で学んだ多くの事をこれからの教育活動に活かしていきたい。

1 中国の概観

中国は東アジアに位置する世界最大級の人口を持つ国で、首都は北京だ。広大な国土には多様な地形と気候が広がり、長い歴史と豊かな文化がある。古代文明の発祥地の一つで、万里の長城や兵馬俑など数多くの世界遺産が残されている。現在は社会主義体制をとりつつ、市場経済を取り入れた「改革開放」政策以降、急速な経済成長を遂げ、世界第2位の経済大国となった。製造業やハイテク産業で国際的な影響力を強める一方、政治体制や人権問題をめぐって国際社会と対立することもある。多民族国家で、漢族を中心に 55 の少数民族が共存している。

2 赴任校の概観

上海日本人学校虹橋校は、上海市中心部から西へ約 8km の住宅地に位置する小学校である。1996 年に現在の校舎が完成し、南棟・北棟・東棟の校舎や体育館、200mトラック、温水プールなど充実した教育施設を備えている。2006 年に浦東校(小学部にあわせて中学部・高等部もあり)が開校して以降、虹橋校は小学部のみを担当している。2025 年 4 月時点で児童数は 986 名、教職員は 110 名である。教育課程は日本の学習指導要領に基づき、英語活動や中国語会話を週 1 時間ずつ取り入れ、国際理解教育を推進している。また、宿泊行事や現地理解を深める活動も行っている。通学は保護者の責任で行われ、個人通学と校車通学の選択が可能である。給食はなく、弁当と水筒を持参する。



上海日本人学校虹橋校 HP (<https://srx2.net.cn/sjs-hq/>) より引用

3 特色のある上海での生活

3 年間の赴任の中で行った教育実践を振り返ってみると、虹橋校は非常に ICT 化に進んだ学校だと感じた。コロナ禍での 4 か月に及ぶオンライン授業、Microsoft Teams を活用した校務の効率化、オンライン懇談会など ICT を活用した実践が多くあった。その土台をなっているのは上海の非常に進んだ ICT 化の影響も少なくないと感じた。様々な面で ICT 化は進んでいるが、多くの人にとって親しみのある「スマホでできること」に焦点をあててまとめることとした。

(1) 決済

赴任した 3 年間一度も財布を持って外出したことはなかった。それは中国全土で普及している電子決済のおかげだ。中国では「Alipay」と「WeChat」という 2 つアプリですべての場所で決済を行うことができる。また、知り合い同士などでお金を送金したり、受け取ったりすることもできるし、銀行口座のお金をドルから元に換金したりもできる。



(2) 乗り物

高速鉄道（新幹線）、地下鉄、バス、フェリーなどの乗り物はすべてスマホのアプリで乗車することができます。もちろん決済もアプリ内で完結する。銀行口座とアプリが紐づいているので、日本の交通系 IC カードようにお金をチャージする必要はない。また、上海の街中にはいたるところにレンタサイクルがあり、これもスマホで乗ることができる。しかも、このレンタサイクルはステーションのようなものではなく、基本的にはどこに乗り捨てても大丈夫である。さらに、アプリ内でタクシーを配車することもできる。



(3) レストラン

レストランでは、机の上にある QR コードをスマホで読み込むことでメニューの一覧表を見ることができる。そして、その画面上で注文を行うことができるので、店員を呼ぶ必要もない。しかも、そのままスマホで決済もできるので、おおげさに言うと店員と会話を一切しなくても食事することができる。



(4) 買い物

お店での買い物はもちろんのこと、インターネットでの買い物もかなり普及している。日本でいう Amazon や楽天のようなアプリが多数存在しており、価格もかなり安い。中国ではインターネットでの買い物がかなり盛んで、年に数回あるネットセールの日（11/11 独身の日、6/1～6/8 六一八商戦など）にはかなりの大金が動き、各プラットフォームも大々的にキャンペーンを展開する。さらに、自宅にいながらレストランの料理を注文することもできる。ほぼ全ての飲食店はこのサービスを展開しており、選択肢もかなり豊富である。しかも価格もリーズナブル。スマホでメニューを選択して注文すると、数分後にはバイクに乗った配達員が、玄関のドアまで届けてくれるので、初めて活用した時は大変感動した。

4 成果

上海で ICT 化の進んだ生活を体験したことで、現在「日本で導入が議論されているもの」や「導入されつつあるシステム」への知見が広がった。例えば以下のようなものがある。

- ・ レストランでの注文タブレット
- ・ PayPay などの電子決済
- ・ レジではなく iPad などを活用した決済
- ・ ライドシェア
- ・ レンタサイクル

これらを実際に体験したことで、ただ知識として知っている…よりかなり深く学ぶことができた。また、自分自身の知見が広がっただけではなく教員としても大きな成果があったと感じる。社会科の学習や総合的な学習で「未来の世の中」や「将来の日本」の授業づくりを行う際のヒントにもなるし、実際に体験して感じたことや考えたこと・良かったところや問題点を子どもたちに伝えることができる。

1. 赴任地（中華人民共和国、北京市）の概観

北京市は、中華人民共和国の首都であり、同国の政治、文化、教育の中心地となる。中国北部に位置し、歴史的な都市で故宮や万里の長城、天壇公園などの数多くの歴史的建造物や文化遺産があり、世界各国から観光客が訪れている。人口は約 2100 万人を越え、中国の大企業「百度」

（Baidu）、テンセント、聯想集団（Lenovo）、中国石油天然気集団、中国国際航空などがある。これらの企業を中心に技術革新やグローバル展開を進め、北京市はビジネスの中心地として役割を強化している。

教育にも力を入れており、北京大学や精華大学など、世界的に知られる高等教育機関があり、国際的な教育の場として注目されている。また、現地の学校教育のカリキュラムの中に多言語習得コースを設けている学校も多く、第一言語の中国語だけでなく、第二言語として世界の言語を習得している方も多い。

歴史と現代が融合する北京は、中国を代表するグローバル都市として、今も発展を続けている。

2. 赴任校（北京日本人学校）の概観

北京日本人学校は、1974 年に北京日本人補習学校、1976 年に北京日本人学校として開校し、2026 年には開校 50 周年を迎える歴史をもつ小中一貫の学校である。2025 年度現在の在籍児童生徒数は、250 人程であるが、1995 年前後の多い時には 700 人程の児童生徒が在籍していた。

学習環境や設備は、とても充実しており、日本の図書が豊富にある図書室をはじめ、音楽室や理科室、技美室に家庭科室など、日本と同等の教具や教材揃っている。

各教室には、MAXHUB、Apple TV、Bluetooth スピーカーが設置され、ICT 教育が推進されている。また、中国、北京市の夏は 40 度を越え、冬は氷点下 10 度を下回る日も多く寒暖差が非常に厳しい。そのため、全教室及び体育館に空調と暖气（ヌアンチ）が完備され室内では快適に過ごすことができる。暖气（ヌアンチ）とは、中国北部を中心に広く普及している、建物全体に温水や蒸気を循環させて室内を温める中央暖房システムのことである。



3. 特色ある教育実践

（1）総合的な学習の時間

北京日本人学校における、教育課程は、日本国内の小・中学校と同様に学習指導要領に基づいて編成されていることに加えて、在外教育施設ならではの特色のある学習カリキュラムを編成している。その中の総合的な学習の時間においては、小学部 3 年生から中学部 3 年生までの 7 年間を見通した「探求的な学習」を編成しており、それぞれの学年、学齢に応じた探求課題を設定している。小学部 3 年生では、「中国（北京市）の町について」から自分たちの住む北京市の町（有名な観光場所や世界遺産）について探求する。小学部 4 年生では、「食文化と伝統について」とし、中国の食文化（主に中国 4 大料理の由来と特徴）について探求する。小学部 5 年生では、「中国における生活を支えるインフラについて」、中国（北京市）の生活の利便性について探求する。小学部 6 年生では、「中国における文化・歴史について」と設定し日本と中国の今までの関係性、これからの望ましい関係性について自分の考えを深める探求活動に取り組んでいる。

(2) 現地校・国際理解交流

現地校との交流事業は、「総合的な学習の時間」を進めるための重要な役割を担っている。

北京日本人学校では、中国（北京）を知るために小学部1年生から中学3年生まで現地校との交流を充実させている。

1・2年生は3e International School という現地の子どもが通うインターナショナルスクール交流を行っている。生活科の学習で作製した「おもちゃ」を活用しおもちゃ屋さんへ招待する活動を設定している。他国の子どもたちとの関わる楽しさを感じるための活動である。

3・4年生は、海淀外国語学校（海淀校）という現地の学校で隔年ごとに両校を訪問し合う交流を設定している。外国語学校ということで、第二、三言語を設定、専攻し多言語を学び習得する学校でもある。交流の内容としては、その年度ごとに総合的な学習の時間で探求した課題について発表する活動と遊びの活動の2本立てで行う。日本人学校で受け入れる年度は、「日本の昔遊び」の紹介をし、訪問させていただく際には、「中国の伝統的な遊び」を共に行う。それぞれの国の遊びをする上で、ジェスチャーや笑顔で意思疎通をする喜びを感じることができていた。

5年生は、同じ中国にある天津日本人学校と交流を行った。北京市と天津市について学んだことについてそれぞれが発表し合い、お互いの頑張りを称え合う貴重な活動となった。

6年生は、小学部の総合的な学習の時間のまとめとして、北京外国語大学付属外国語学校と共同研究を行う。共同研究は、日本人と中国人がグループになり、身近なテーマ（食や習慣など）からお互いのことを紹介し、それぞれ文化の違いと良さについて共同でまとめる活動である。共同で進めるからこそその難しさを感じながらもお互いの思いが通じ合ったり、良さを認め合ったりすることで国際理解につながると体感できた活動であった。



4. 成果（派遣教員として得たもの）

北京日本人学校では、在任の3年間のうち2年間で小学部長として、小学部の取りまとめをさせてもらった。その中で、「学校として」という視点から、子どもたちにつけさせたい力、成長して欲しい姿を明確にイメージしながら教育課程を編成することができた。何が大切で何のためにその授業や活動を設定するのか、一つ一つ確認しながら同僚の教員と教育活動を進められたことは自分の中で貴重で有意義な時間であったと思う。全国各地から集まった仲間と、目の前の子どものために自分たちができることを必死で考え、知恵を出し合い子どもたちの成長を支えることができたことは人生の宝となった。

「パリ日本人学校に赴任して ～在外教育施設の現状～」

明石市立大久保南小学校 荻野 竜平

1 赴任地(国)の概観

赴任地フランスは、数多くの有名な歴史的建造物や世界遺産を有し、文化・芸術の都として多くの観光客を魅了しているEU諸国の一つである。スペイン、イタリア、スイス、ドイツ、ルクセンブルグ、ベルギーなどの国々と隣接しており、多くの国の人や文化の影響を受けている。緯度が高いため、日照時間が季節によって大きく異なり、サマータイムを取り入れている。気候は、日本に比べ乾燥しており、夏は暑く冬は寒い地域であり、寒暖差が大きい。

2 赴任校の概要

パリ日本人学校は、1970 年以降に起こった首都パリの爆発的な人口増加に伴い、1990 年代にパリ近郊のベッドタウンであるモンティニー市に新校舎を構え移転した。日本語で教育を受けることができるフランスで唯一の全日制の学校であり、パリ周辺から現在小学部・中学部併せて 170 名程の児童生徒が通学バスで通っている。

3 特色ある教育実践

(1) 総合的な学習の時間を使ったフランス語学習

総合的な学習の時間の半分を使って、フランス語学習を実施していた。現地で生活していく上で必要不可欠となる現地の言葉を学び、文化の交流を図っていた。年に一度、現地校との交流も行い、学習の成果を発揮したり、現地の文化に触れたりする機会を確保していた。

(2) 2024 バリオリンピック・パラリンピックへの参加

①フラワーレーンプロジェクト

コロナ渦で開催された 2020 東京オリンピックから受け継いだ朝顔の種を引き継ぎ、日本人学校の近くの自転車競技会場付近に、全校で育てた 300 鉢の朝顔を並べて、選手や観客を出迎えた。前オリンピック担当大臣も駆けつけ、文字通り「オリンピックに花を添える」取り組みとなった。



②パラアスリートのとの交流

企業車所属のやり投げ選手を招き、障害を受け入れ、競技に臨むまでの自身の経験談を交えながら講和をしていただいた。また、様々な協会のご厚意で、パララグビーや自転車競技の試合を生で観戦させていただき、パラアスリートの技を肌で感じる機会となった。

(3)芸術や文化に触れる校外学習

パリ近郊には多くの名だたる美術館が存在している。発達段階に応じた美術館を訪れ、本物の作品に触れる機会を確保していた。また、UNESCOやOECDの本部があるため、校外学習で行かせていただき、学びを深めることができた。



4 成果(派遣教員として得たもの)

(1)価値観共有の重要性

日本での勤務においても重要性は認識していたが、47都道府県から集った同僚と「良いこと」、「良くないこと」、「すべきこと」、「すべきでないこと」など、赴任前は特段意識しなかったいわゆる「当たり前」を共有する大変さと、重要性について考える景気となった。

(2)教材教具の創意工夫

日本では簡単に手に入るものが、海外ではなかなか手に入らない実情がある。日々の学習では、ノートが揃わず、適切なマスの大きさのノートが使用できない中での指導が求められる。特に、習字では半紙や筆、墨汁や新聞紙、理科では各種植物の種や苗、メダカやリトマス紙や気体検知管などがなかなか手に入らず、学習キットは使うことができない。水道水(硬水)の成分の違いによる異なる実験結果の考察なども必要となってくる。現地で調達可能で、代替できるものを探す作業から教材研究を始めなければならない実情があった。

(3)在外教育施設に通う子供や保護者の願い

海外という特殊な環境の中で子供や保護者が抱える苦労や願いに直接触れることができた経験は、今後の教員生活の中でも消えることはない、貴重なものとなった。

1 赴任地（イタリア）の概観

ローマ（ROMA）はイタリアの首都、ラツィオ州の州都、ローマ県の県都でもある。中世には宗教的首都として、現在はイタリアの共和国の政治の中心地としての機能を果たしている。また、世界で最も有名な観光都市のひとつである。映画「ローマの休日」でお馴染みのスペイン階段、トレヴィの泉、バチカン市国など、誰もが一度は目にしてみたい場所が身近にある。また、2000年以上の歴史を物語る多くの史跡や、それに付随する美術品を展示する美術館・博物館にあふれている。公用語はイタリア語だが、地理的、歴史的背景から諸民族が混合しているため、髪、肌、目の色などは多種多様で、イタリア人でも他の国の人と見分けがつかないという。



2 赴任校の概要

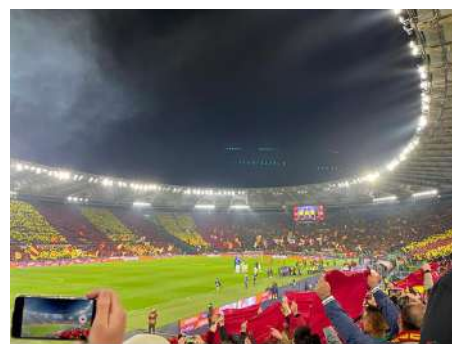
ローマ日本人学校の歴史は、昭和50年（1975年）10月にローマ日本語補習校が開校した。その後、何度か校舎移転を経て、昭和62年（1987年）4月に現地名称を「ローマ日本人学校」と改称、全日制小学部1～3年を開設したが、日本国政府からの認可は下りていなかった。昭和63年に「ローマ日本人学校設立計画書」を外務省に提出し、校舎をモンテ・サクロ地区に移転。平成元年（1989年）に「ローマ日本人学校設立計画書」を再提出。翌年の平成2年（1990年）6月により、日本国政府から正式に日本人学校として認可された。その後も何度か校舎移転をし、現在はモンテ・クッコ通りに小学部と中学部がある。

全校児童生徒数は、20名程度であり、隣接していた日本人幼稚園は令和6年に休園した。

3 特色ある教育実践

（1）運動会の運営

ローマ日本人学校としての運動会は、平成2年（1990年）の10月が1回目である。その後、ローマ日本語補習授業校、ローマ日本人幼稚園とともに合同運動会を開催してきた。



しかし、近年の新型コロナウイルス感染症と令和3年度の校舎移転に伴い、令和3年度、令和4年度は、合同運動会を中断していた。新型コロナウイルスが落ち着いた、令和4年度のローマ日本人学校単独の運動会後には、「来年度は日本人学校、日本語補習授業校、幼稚園の3校合同運動会を再開してほしい。」という声が上がった。そして、当時の日本人学校校長から、「合同運動会を再開したいので、委員会を開いて計画を立ててほしい。」と私に依頼があった。そこで、令和4年度9月に「2校1園合同運動会検討委員会」をおこない、計画を始めた。

私自身としては、3年間で、単独運動会、合同運動会を合わせて3回運営し、日本の中学校の体育大会との違いを経験できたことは貴重だった。

1年目は、日本人学校の児童生徒12名のみでの開催となった。派遣されて初めての運動会が少人数での開催となり、運営に悩んだ。各学年に分かれての演技は2～4名で披露するため、見せ方や空間の使い方に苦労した。他の教員と協力し、親子競技を入れたり、衣装を工夫したり、児童生徒が活躍できる場面を設定したり、少人数をカバーする工夫をした。

2年目は、コロナ後初めての3校合同での運動会を開催することとなった。合同運動会を経験している教員が管理職を含めて誰もおらず、ゼロからのスタートとなった。半年前から日本語補習授業校、日本人幼稚園と何度も会議を重ねて開催した。3歳から15歳の年齢差や、日本とイタリアの文化の違い、教育課程の違い、目的意識の違いなど、さまざまな課題を考慮しながら運営しなければならなかった。特に日本語補習授業校は、教職員ではなく、保護者の中から「運動会委員」を選出して運営にあたるこ

ととなっていた。そのため、学校行事の運営の仕方を知らない人がほとんどであった。合同開催だが、日本人学校が主となり日本人幼稚園、日本語補習授業校に役割を分担していく形をとった。また、日本の学校のように校区内に自宅があるわけではないため、会議は ZOOM でおこない、資料の送付や連絡などはメールでおこなった。

当日は、文化の違いや年齢差、学校教育の違いなどがあり、反省点や改善点が多くみられた。例えば、日本語補習授業校の児童生徒は普段、イタリアの現地校かインターナショナルスクールに通っている。日本の学校のように集団行動を習わないため、入場門に整列するのにかなりの時間がかかった。50m 走やリレーのスタート方法を知らない児童生徒も多かった。当日の欠席や遅刻も多く、リレーや50m 走の走順で混乱が生じた。また、最年少児童が3歳で、開閉会式で長時間座っていられなかったり、児童席ではなく保護者席で過ごしたり、想定外のことがいくつかみられた。

3 年目は、前年度の反省点や改善点を考慮して、実施要項などさまざまな資料を作りなおした。さらに、日本人幼稚園が休園となったため、日本語補習授業校と日本人学校の2校での開催となった。

前年度の経験を活かし、より細部にわたって考えることができた。大きく改善した点は、入退場門をなくし、直接スタート地点に整列させて、競技後はそのまま自席に退場することで混乱を避け、時間短縮をはかった。次に、学校交流という点を考え、開閉会式の役割を2校の児童生徒からそれぞれ選出することとした。そして、親子競技での兄弟関係や当日の欠席などを考慮して、「幼稚園」「低学年」「中学年」「高学年」「中学部」と学年を細かくブロック分けをして競技を進めるように変更した。日本語補習授業校にも、さまざまな工夫をして協力してもらった。例えば、児童生徒全員に学年、氏名、走順などを記載したシールを貼って、わかりやすくしたり、運動会委員の保護者がスタート位置まで誘導し、点呼をしたりして、日本人学校の教職員が児童生徒の管理をしやすくしてもらった。令和5年度の反省を活かして実施したことで、令和6年度はスムーズな運営ができた。

(2) 個々の実態に応じた教育

ローマ日本人学校は、全校児童生徒数が20名程度の小規模校である。学級人数が最大で7名であった。そのため、体育などの実技教科は2学年合同で授業をおこなった。

派遣された当初は、少人数の授業展開や、行事運営などに戸惑うことが多かった。しかし、少人数だからこそ個々の実態に応じた指導をすることができた。

運動会の演技「エイサー」では、全校生で一つの演技をおこなうことで、少人数をカバーして迫力を出した。また、発達段階に合わせて、「手踊り」「パーランクー」「大太鼓」と役割を分けて、振付を変えることで、年齢に応じた学びを実現させた。

1年目の担当学級は、学力差が大きく、国際色も豊かな2人学級であった。一方は授業内容を完璧に理解し、応用問題も楽しんで取り組んでいた。もう一方は、理解できない日本語も多く、日本の教育課程で学ぶことが初めてであった。そのため、同じ進度で、同じ学習課題をおこなうことが困難であった。初めての経験だったが、少人数だったことで、一人ひとりに最適な指導を丁寧におこなうことができた。国語の授業では、話し合いの場面や音読の際は一斉に指導し、漢字や作業をする際は、個々に合わせた課題を出し、それぞれに合わせた最適な学びを目指した。

体育の水泳実習では、学年ではなく泳力によってグループをわけて実施した。そのため、小学2年生と中学生が同じグループで学習することもあった。学年関係なく、個人の泳力で目標や課題を見つけて学習することで、主体的に自ら学ぶことができる環境を設定した。少人数だからこそ、学年や体格に差があっても、一人ひとりの安全を確保しながら指導することができた。

生活指導でも、少人数であったため、一人ひとりを理解して、個人にあった指導を丁寧におこなうことができた。年齢や、発達段階に考慮した言葉遣いをし、視覚や聴覚、触覚など多角的、多面的に物事がとらえられるように指導することを意識した。

少人数での学習や生活指導は、メリットもデメリットもあることを実感したが、落ち着いて一人ひとりと向き合うことができた経験は、私自身の成長と自信につながった。



4 成果

古代ローマ帝国の遺跡、ルネサンス期の芸術、あたたかく明るいイタリアの人々、そして現代的な活気が融合した街並み。そんなイタリアで、日本の教育活動を通して成長できたことは、大きな自信につ

ながった。

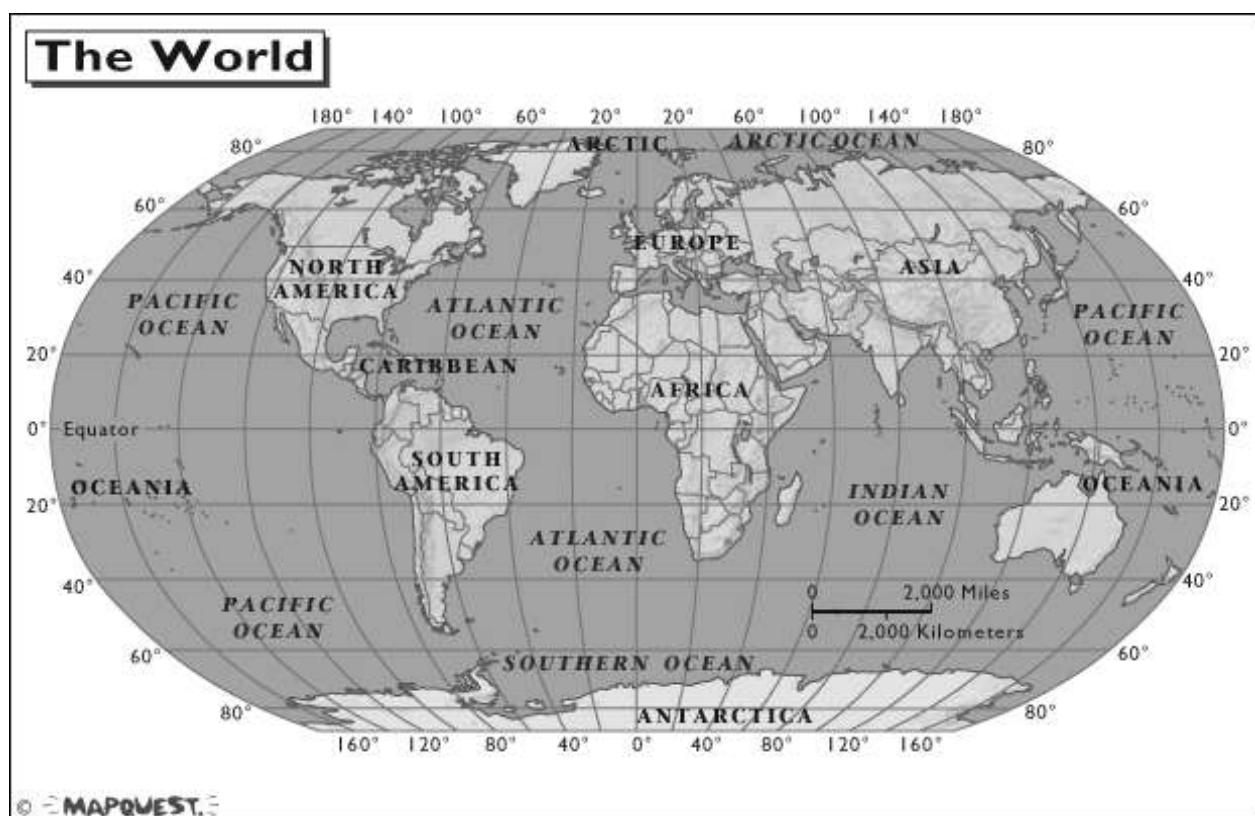
イタリアと日本の文化の違いを把握して工夫したり、それぞれの学校の教育課程の違いを考えて対策をしたり、海外で教育する意味を考えることができた。

自分たちとは違うイタリアの文化を知り、受け入れ、認め合える、グローバルな力を養うことができたのではないかと感じる。この実践経験は、日本においても多様化する子どもの実態に合わせた教育活動をするにあたり、非常に有用であった。

現在、久しぶりに 36 人の学級担任をしているが、個々の実態は多様である。ローマ日本人学校での経験から、落ち着いて生徒一人ひとりを見ることができるようになった。これを次の世代にしっかりと伝達していきたい。

最後に、日本人学校の児童生徒が、合同運動会をはじめさまざまな行事を通して、日本文化を発信しながら世界に目を向け、日本人としてのアイデンティティを誇りに、世界を舞台に活躍していくことを期待して報告とする。

《活動状況》



活 動 状 況 目 次

令和7年度 兵庫県在外教育施設派遣教員一覧	36
兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織	37
令和6年度 事業報告	38
令和6年度 多文化共生・国際教育セミナー実施報告	39
令和6年度 会計報告	40
令和7年度 予算案	41
令和7年度 事業計画	42
令和7年度 多文化共生・国際教育セミナー計画書	43
兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則	44
兵海研 入会申込書	46

令和7年度(2025年度) 兵庫県在外教育施設派遣教員一覧

帰国者		おかえりなさい!	
■ RO4(2022)年度派遣 ■(派遣時24		派遣3年目	
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属
濱川 理恵	イタリア	ローマ	伊丹 南中
中嶋 来未	インドネシア	ジャカルタ	尼崎 園和北小
福島 寿美	インドネシア	ジャカルタ	洲本 五色中
宮本 建志	シンガポール	シンガポール	明石 大久保中
日生下 瞳	タイ	バンコク	明石 錦城中
清瀬 裕史	台湾	台北	姫路 船場小
三浦 一郎	チェコ	プラハ	姫路 手柄小
北野 淳也	中国	北京	宝塚 逆瀬台小
林 優也	中国	上海(虹橋)	姫路 大津小
兵藤 大輔	中国	広州	加西 西在田小
飯塚 泰晴	ドイツ	フランクフルト	西宮 甲子園浜小
杉本 裕司	ドイツ	ミュンヘン【頭】	川西 シニア
荻野 竜平	フランス	パリ	明石 大久保南小
市原 久土	香港	香港	高砂 曽根小
野田 淳子	マレーシア	ペナン	神戸 伊川谷中
中川 英毅	マレーシア	ジョホール	姫路 吉知小
宇野 弘子	台湾	台中	シニア
西脇 正和	メキシコ	日本メキシコ学院	香美 シニア
中石 孝人	メキシコ	グアナフアト【頭】	福崎 シニア
荒谷 芳生	アメリカ	ローリー補習校【長】	芦屋 シニア
中野 龍文	アメリカ	オランダ補習校【長】	丹波 シニア
松下 紋華	ベルギー	ブラッセル	尼崎 大島小

ただいま奮闘中		派遣3年目	
■ RO5(2023)年度派遣 ■(派遣時24		派遣3年目	
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属
丸山 智史	インド	ムンバイ	宝塚 宝塚中
石本 麻衣	インドネシア	スラバヤ	川西 明峰小
岡崎 功	シンガポール	チャンギ	西宮 上ヶ原中
松井 英人	タイ	バンコク	神戸 神河中
芦田 学	タイ	バンコク	たつの 龍野高
小島 周平	タイ	シラチャ	尼崎 園和北小
濱野 有加	韓国	ソウル	姫路 香寺中
吉田 智子	中国	広州	西宮 甲陵中
関 和真	中国	深圳	
石原 孟	中国	上海(浦東)	網干 網干高
松井 仁美	中国	上海(浦東)	洲本 五色中
佐野 春愛	中国	上海(浦東)	宝塚 長尾中
小林 愛子	中国	上海(浦東)	神戸 本庄中
金山 透	中国	蘇州	洲本 洲本第二小
若佐真由実	フィリピン	マニラ	尼崎 園田東中
村岸幸太郎	オーストラリア	シドニー	神戸 舞子高
西垣 勝嘉	オーストラリア	メルボルン	豊岡 小野小
柳 央恵	アメリカ	ニューヨーク	
横山 嘉一	メキシコ	アグアスカリエンテス	西宮 段上西小
桑田 亮菜	イタリア	ローマ	西宮 上ヶ原中
宮里 篤実	オランダ	アムステルダム	尼崎 下坂部小
杉山 貴彦	ドイツ	デュッセルドルフ	西宮 東山台小
大塚 直哉	ハンガリー	ブダペスト	尼崎 武庫北小
西田 隆之	イラン	テヘラン【長】	丹波 中央小シニア
長谷川 貴洋	サウジアラビア	リヤド	姫路 広峰小

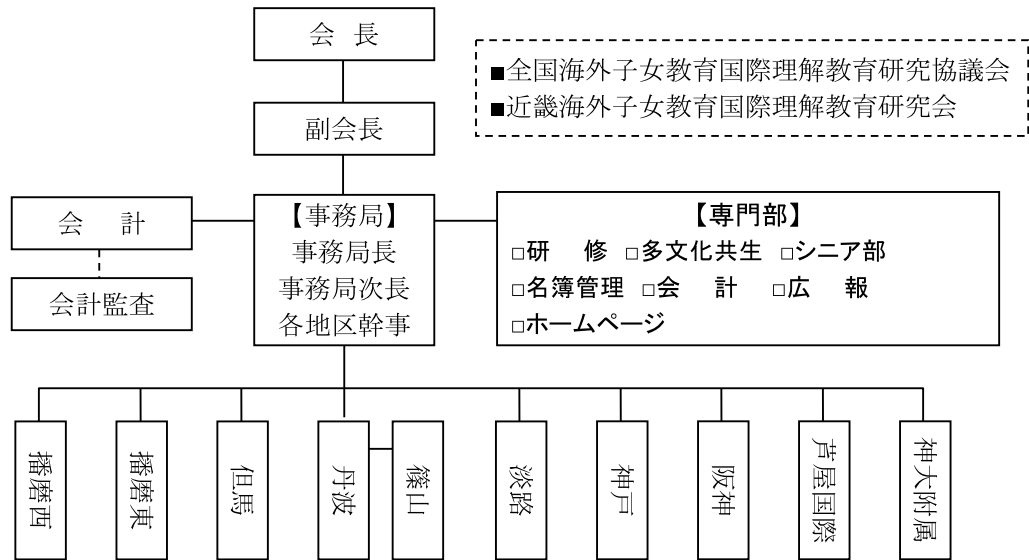
ただいま奮闘中		派遣2年目	
■ RO6(2024)年度派遣 ■(派遣時29		派遣2年目	
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属
笠井 柚伽	インドネシア	ジャカルタ	高砂 曽根小
西山さやか	シンガポール	チャンギ	川西 多田小
平野 貴史	タイ	バンコク【頭】	洲本 鮎原小
松本 拓也	タイ	バンコク	尼崎 立花小
青野 弘和	タイ	シラチャ	高 須磨友が丘高
佐々木国江	ベトナム	ホーチミン	高砂 シニア
森本 悠太	ミャンマー	ヤンゴン	西宮 甲陽園小
正延 和也	韓国	プサン	赤穂 城西小
門屋 直人	台湾	台中	南あわじ 三原中
土谷 久美	中国	広州	高 三田祥雲館高校
伊藤 明子	中国	広州	神戸 湊小
深澤 亮	中国	上海(虹橋)	伊丹 荻野小
米田 梨衣	中国	上海(虹橋)	尼崎 浜小
佐渡 礼	中国	青島	宝塚 山手台小
松田 大輝	中国	深圳	神戸 長田中
山口 潤	中国	蘇州	たつの 龍野西小
藤本 佳昭	カンボジア	プノンペン	神戸大付属中
木原亜理紗	イラン	テヘラン	神戸 西灘小
村岡 英樹	トルコ	イスタンブール	神戸 魚崎中
中道 あみ	チェコ	プラハ	加古川 永丘中
松原 秀樹	フランス	パリ	神崎 甘地小
和田 祥子	アメリカ	シカゴ	西宮 上ヶ原中
小田 環	アメリカ	ニュージャージー	丹波 シニア
山上 徳義	コスタリカ	サンホセ	丹波 城南小
青田 晋平	メキシコ	グアナフアト	加西 宇仁小
梅田 拓人	オーストラリア	パース	丹波 東小
小橋 幸代	オーストラリア	メルボルン【長】	神戸 シニア
平島 理絵	オーストラリア	メルボルン	尼崎 武庫庄小
本木 賢司	メキシコ	グアダハラ補習校【長】	シニア

本年度 新規派遣者		派遣1年目	
■ RO7(2025)年度派遣 ■(派遣時34		派遣1年目	
派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属
松本 肇仁	アメリカ	ジョバズ補習【頭】	姫路 シニア
市橋 未希	アメリカ	ニュージャージー	西宮 用海小
西垣 克哉	インドネシア	バンドン	豊岡 神美小
宮本 啓	インドネシア	ジャカルタ	小野 小野南
改發 大記	インドネシア	ジョホール	加古川 志方東小
松本つばさ	中国	大連	神戸 有野小
坂本 亜衣	中国	大連	西宮 山口中
山崎 情	中国	蘇州	西宮 今津小
倉持 敦	中国	広州	神戸 松尾小
松原 功	中国	香港(香港)	芦屋 山手中
濱崎 公美	中国	上海(浦東)	尼崎 南武庫之荘中
小谷 竜平	中国	上海(浦東)	太子 石海小
高場 政晃	中国	上海(虹橋)	明石 明石高校
平原 祐助	中国	上海(虹橋)	西宮 夙川小
田中 洸輔	台湾	台北	西宮 フレ嶋尾中
濱田 奈穂	ベトナム	ホーチミン	伊丹 フレこやの里
嶋田 有紀	ベトナム	ハノイ	西宮 西宮高校
古塚明日人	マレーシア	クアラランプール	西宮 香風高校
上野 智子	マレーシア	ペナン	姫路 城山中
田畑 貴世	タイ	バンコク	相生 青葉台小
岸本 淳子	タイ	バンコク	小野 シニア
藤原 健人	シンガポール	チャンギ	西宮 北夙川小
田淵 知紗	シンガポール	クレメンティ	神戸大付属小
高松 郁美	シンガポール	クレメンティ	南あわじ 複列小
投石 浩縁	インド	ニューデリー	芦屋 シニア
垣内 浩	フランス	パリ	シニア
岩本 幸恵	スイス	チューリッヒ	
東畑 優太	オランダ	ロッテルダム	川西 桜が丘小
大原 静香	ベルギー	ブラッセル	姫路 安室小
野口 翔悟	イタリア	ミラノ	西宮 上ヶ原中
土居 靖明	エジプト	カイロ	姫路 書写中
高井 伸輔	アルゼンチン	ブエノスアイレス	石川 鶴居小
丸山 篤史	ブラジル	マナオス	西宮 塩瀬中
白井真理子	オーストラリア	シドニー	西宮 シニア



令和7年度

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織



会 長	田中 秀滋	事務局次長	河野 真也
副会長	小畑 幸一 (研修)	事務局次長	原田 英聖 (研修)
	島多 峰史 (帰国報告会)		村上 貴士 (研修)
	中井 治嗣 (組織)		田邊 晃子 (研修)
	小池 宏尚 (渉外)		塚本 与久 (研修)
	増田 恵津子 (研修)		二谷 洋平 (組織)
会 計	二谷 洋平		西村 一将 (研修)
研 修	小谷 仙嘉 (帰国報告会)		春名 祥吾 (研修)
	望月 優生 (帰国報告会)		川邊 満久 (研修)
	上阪 浩一 (帰国報告会)		矢野 越史 (組織)
名簿管理	中井 治嗣		徳野 雅信 (研修)
	二谷 洋平		
多文化共生 (教育相談)	西村 一将		
	小池 宏尚、水田 良		
監 事	照本 忠光、足立 浩	ホームページ	原田 英聖
シニア部	照本 忠光、足立 浩	広 報	小池 宏尚
	宮田 正彦、八幡 良一		河野 真也

地 区 幹 事			
神 戸	村上 貴士、徳野 雅信	播磨西	富士原伸人、小谷仙嘉、望月優生
阪 神	塚本 与久、田邊 晃子	播磨東	水田 良
丹 波	梅垣 泰三、伊藤 憲司	但 馬	中沢 泰明、古川 貞之
篠 山	中野 純也、小嶋 拓也	淡 路	河野 真也
芦屋国際中等教育学校	中澤 大樹	神大附属小中	丸岡 慶子、田淵 知紗

特別顧問	水岡 俊一		
元会長	谷口 哲、生野康一、橋本 力、茶谷紀元、瀧山康二、西田富男、青木芳信		
	串光宏司、榊田邦夫、森本孝、横田政美、宮田正彦、中馬義治、照本忠光		
	丸山一則、足立 浩、高木浩志、松本肇仁、島多峰史		
顧問	大月 祐三、八幡 良一、杉本 裕司、津瀬雅之		
海外幹事	藤本 孝仁、西田 隆之、松本 肇仁、田淵 知紗		
全海研顧問	生野 康一	全海研副会長	高木 浩志
全海研事務局次長	原田 英聖	全海研研修担当	河野 真也、塚本 与久

令和6年度 事業報告

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ①帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ②一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③兵海研活動の活性化
 - ・帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④全海研全国大会への参加
- ⑤近畿ブロック大会への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会（歓迎会） 5/11(土) 兵庫県立のじぎく会館
- (2) 帰国報告会 6/15(土) 姫路市市民会館
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（兼在外教育施設派遣志望者研修会）
 - 第1回 5/11(土) 『海外子女教育の概論』（場所:兵庫県立のじぎく会館）
 - 第2回 6/15(土) 【帰国報告会】（場所:姫路市市民会館）
 - 第3回 11/ 2(土) 【近畿ブロック大会】（場所:たかつガーデン（大阪市））
 - 第4回 12/21(土) 『在外教育施設での多文化共生について』（場所:兵庫県立のじぎく会館）
 - 第5回 2/15(土) 『保護者の目・派遣OBを交えて』（場所:兵庫県立のじぎく会館）その他、各地区・各団体との研修会
(すべてのセミナーにおいて、オンラインも併用)
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会……各地区の特色を生かした「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ①ホームページの更新、充実（アドレス<http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ②海外からの実践報告、兵海研諸活動告知等は、HPやSNSを利用して発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携
- (9) 全海研本部との連携 全国大会（鳥取:米子市コンベンションセンター） 8/9(金)～10(土)
- (10) その他の活動
 - ・兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・各市町教育委員会
 - ・兵庫県国際交流協会
 - ・帰国子女教育を考える会
 - ・兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・JICA関西
 - ・（公財）海外子女教育振興財団
 - ・関西帰国生親の会かけはし
 - ・兵庫OV教員研究会

令和6年度 多文化共生・国際教育セミナー報告書

下記の表のように5回の研修会を行いました。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月11日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：兵海研会長
第2回	6月15日（土） 9：30～17：00 姫路市市民会館 （姫路市総社本町112）	帰国報告会 2023年度帰国教員による活動報告他
第3回	11月 2日（土） 14：00～16：00 たかつガーデン （大阪市天王寺区東高津町7-11）	第33回近畿ブロック国際理解教育研究会 大阪会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月21日（土） 14：00～17：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	内容：在外教育施設での多文化共生について ～ZOOMを活用して派遣中教員から学ぶ～
第5回	2月15日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員・派遣中教員

2024年度 兵海研会計決算報告

収入の部

繰越金	180,576	
会費	72,000	(2000円×36名)
研修費	59,000	(研修会参加費)
その他	0	
計	311,576	

支出の部

印刷・通信費	4,090	(用紙、インク、ハガキ、文書発送費等)
研修費	29,888	(会場費、運営補助等)
研究紀要費	0	(印刷、冊子製本等)
事務経費	15,000	(事務局運営、連絡会議費等)
消耗品	0	(文具、U S B 等)
H P サーバー	5,000	(2024年度分更新料)
その他	6,000	(謝礼等)
計	59,978	

$$311,576 - 59,978 = 251,598$$

2024年度 会計監査報告

規約の規定に基づき、監査したところ、正しく処理されていたことを認めます。

2025年 4 月 30 日

監査委員

照本 忠光



2025年度 兵海研会計予算（案）

収入の部	項目	予算額	(単位：円)
	繰越金	251,598	(2024年度繰越金)
	会費	60,000	(2,000円×30名)
	雑収入（研修費等）	30,000	
計		341,598	

支出の部	項目	予算額	(単位：円)
	印刷・通信費	10,000	(用紙、インク、ハガキ、文書発送費等)
	研修費	35,000	(会場費、運営補助費 等)
	研究紀要費	10,000	(印刷、冊子製本等)
	事務経費	40,000	(事務局運営、連絡会議費、全海研費等)
	消耗品費	5,000	(事務文具 等)
	HPサーバー代	5,000	(2025年度分更新料)
	その他	236,598	(講師謝礼、次年度繰越予定額)
計		341,598	

令和7年度 事業計画

1 活動方針

『21世紀の多文化共生に向けて』 ～派遣経験をいかに活かすか～

- ① 帰国教員の海外経験を活かした帰国子女・国際理解教育の推進
 - ・ 派遣志望者、シニアへの研修活動
 - ・ 多文化共生・国際教育セミナーの実施
- ② 一般教員・保護者への外国人・海外子女・国際理解教育の啓発
- ③ 兵海研活動の活性化
 - ・ 帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行）
 - ・ 各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
- ④ 全海研全国大会への参加
- ⑤ 近畿ブロック大会への協力/参加

2 事業計画

- (1) 総会（歓迎会） 5/10(土) 兵庫県立のじぎく会館
- (2) 帰国報告会 6/14(土) JICA関西
- (3) 多文化共生・国際教育セミナー（兼在外教育施設派遣志望者研修会）
 - 第1回 5/10(土) 『海外子女教育の概論』（場所:兵庫県立のじぎく会館）
 - 第2回 6/14(土) 【帰国報告会】（場所:JICA関西）
 - 第3回 11/22(土) 【近畿ブロック大会】（場所:京都）
 - 第4回 12/20(土) 『在外教育施設での多文化共生について』（場所:兵庫県立のじぎく会館）
 - 第5回 2/14(土) 『保護者の目・派遣OBを交えて』（場所:兵庫県立のじぎく会館）
 - その他、各地区・各団体との研修会

（すべてのセミナーにおいて、オンラインも併用予定です）
- (4) 派遣教員激励会
- (5) 各地区研修会・実践交流会……各地区の特色を生かした「国際理解教育研修会」
- (6) 帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成
 - 会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
 - 会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。
- (7) 広報・編集
 - ① ホームページの更新、充実（アドレス<http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/>）
 - ② 海外からの実践報告、兵海研諸活動告知等は、HPやSNSを利用して発信
- (8) 全海研近畿ブロックとの連携
- (9) 全海研本部との連携 全国大会（茨城:ザ・ヒロサワ・シティ会館） 8/8(金)～9(土)
- (10) その他の活動
 - ・ 兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
 - ・ 派遣教員への情報提供と教材支援
 - ・ 在外教育施設教育事情視察
- (11) 関係諸団体との連携
 - ・ 兵庫県教育委員会（人権教育課、子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
 - ・ 各市町教育委員会
 - ・ 兵庫県国際交流協会
 - ・ 帰国子女教育を考える会
 - ・ 兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
 - ・ JICA関西
 - ・ 関西帰国生親の会かけはし
 - ・ （公財）海外子女教育振興財団
 - ・ 兵庫OV教員研究会

令和7年度 多文化共生・国際教育セミナー計画書

下記の表のように5回の研修会を計画しています。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第1回	5月10日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：兵海研会長
第2回	6月14日（土） 9：30～17：00 JICA関西 （神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2）	帰国報告会 2024年度帰国教員による活動報告他
第3回	11月22日（土） 13：00～16：00 京都	第34回近畿大ブロック国際理解教育研究会 京都大会 国際理解教育 現地理解教育 多文化共生教育
第4回	12月20日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	内容：在外教育施設での多文化共生について ～ZOOMを活用して派遣中教員から学ぶ～
第5回	2月14日（土） 10：00～12：00 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通4-22-15）	「在外派遣を考える～配偶者の立場から～」 講師：関西帰国生親の会かけはし 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員OBを交えて～ 講師：兵海研会員・派遣中教員

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則

■第一章■

第一条 本会は兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（略称：兵海研）と称する。

■第二章■ （目的および事業）

第二条 本会は国際的視野にたった海外子女教育および国際理解教育、多文化共生教育の充実発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 海外子女教育・国際理解教育・多文化共生教育に関する研究の推進
2. 海外子女教育・国際理解教育・多文化共生教育に関する研究会、交流会の開催
3. 海外子女教育に関する教育相談の実施
4. 会員相互の情報交換を行うための会報の発行
5. 在外教育施設に派遣中の教師に対する情報交換や援助
6. 全国海外子女教育国際理解教育研究協議会との連携に基づく活動
7. その他 本会の目的を達成するために必要な事業

■第三章■ （会員）

第四条 本会の会員は在外教育施設に派遣された者および本会の趣旨に賛同する者で年会費を納入した者で構成する。派遣時に年会費を納入した者は、3年間準会員として本会から連絡等を受けることができるものとする。

■第四章■ （役員）

第五条 本会には次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 事務局長 1名
4. 事務局次長 若干名
5. 会計部長 1名
6. 専門部長 若干名
7. 地区幹事 若干名
8. 監事 2名
9. 顧問

第六条 役員は総会において選任される。

第七条 会長は本会を代表し会務を総括する。

副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときはその任を代行する。

事務局長は本会に関する事務を行う。

事務局次長は事務局長を補佐する。

会計部長は本会の会計の事務を行う。

専門部長は各専門部の活動を推進する。

地区幹事は地区の会員をまとめ、地区の活動を推進する。

監事は本会の会計を監査する。

顧問は必要に応じて置くことができる。

第八条 役員の任期は1年とする。但し再任は妨げない。

補欠により選任された役員の任期は前任者の在任期間とする。

第九条 本会は事務局を事務局長の勤務場所に置く。

■第五章■ （機関）

第十条 本会に次の機関を置き、会長がこれを召集する。

1. 総会
2. 役員会

第十一条 総会は毎年1回召集する。但し必要に応じて臨時に召集することができる。

役員会は必要に応じてこれを召集する。

第十二条 総会は次の事項を審議する。

1. 事業計画
2. 予算および決算
3. 会則の変更
4. その他 必要事項

※緊急かつやむを得ない事情により総会を開くことができないときは役員会の決議をもってこれにかえることができる。この場合は該当事項について、次回の総会で承認を得なければならない。

第十三条 役員会は次の事項を審議する。

1. 総会での審議を要しない事項で、本会の運営に関する事項
2. 総会に提案する議案の検討
3. その他 会長が必要と認める事項

■第六章■ (会計)

第十四条 本会の費用は会費・寄付金・その他の収入をもってこれにあてる。

第十五条 本会の会費は年額2000円とする。

第十六条 本会の会計年度は、毎年総会に始まり、翌年の総会の前日に終わるものとする。

第十七条 退職後の会費の支払いは任意とする。

(この会則は昭和57年9月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、昭和62年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成元年6月1日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成3年6月2日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成8年5月25日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成9年5月24日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成11年5月8日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成15年5月10日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成24年5月6日から施行する)

(この会則は一部修正の上、平成30年5月5日から施行する)

(この会則は一部修正の上、令和5年5月6日から施行する)

(この会則は一部修正の上、令和6年5月11日から施行する)



令和7年度 兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会 (兵海研)入会のご案内

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会事務局

私たち兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会(兵海研)は、兵庫県内の小中学校・高等学校・特別支援学校教員が中心となって組織している研究団体です。県内の国際理解教育や帰国子女教育・多文化共生教育、また、在外教育施設等への派遣教員による海外子女教育の充実・発展をめざして精力的に活動しています。ぜひ兵海研に入会し、一緒に学び合いませんか！？

年度ごとに更新のため、昨年度会員の方もあらためて入会が必要です。

【 会員特典 】

- 兵海研が主催する各種セミナーにご参加いただけます。年5回以上。
- 兵海研からの情報(セミナー案内、派遣先関連等)を提供いたします。
- 兵海研の海外子女教育、国際理解教育に関わるネットワークにご参加いただけます。

【 主な活動 】

- 国際教育セミナー(在外教育施設派遣希望者研修会)
- 在外教育施設帰国教員による帰国報告会(海外教育事情等)
- 派遣教員激励会、帰国教員歓迎会の企画
- 近畿ブロック国際理解教育研究大会の運営・協力
- 在外教育施設派遣教員への支援活動
- 県内各地域での国際理解教育・多文化共生教育実践交流
- HPやML、LINEグループによる活動報告や国際理解教育関連の情報提供 等

【令和7年度活用計画】

- | | | |
|----------------|-----------------|------------|
| ① 5/10(土)午前 | 総会・第1回セミナー | @県立のじぎく会館) |
| ② 6/14(土)午前・午後 | 帰国報告会 | @JICA関西 |
| ③ 11/22(土)午後 | 近畿ブロック京都大会 | @京都 |
| ④ 12/20(土)午前 | 第4回セミナー・現地との交流会 | @県立のじぎく会館 |
| ⑤ 2/21(土)午前 | 第5回セミナー・派遣者壮行会 | @県立のじぎく会館 |

【 会 費 】①②いずれかの方法でお支払いください。

年会費2,000円 (会場費・資料費・通信費等、各セミナー参加費が1,000円なので、お得です)

①セミナー会場で支払う

②振 込 ゆうちょ銀行 ○九九支店(ゼロ・キュウ・キュウしてん)

口座種類:普通 口座番号:口座番号 00900-7-94943

名義:兵庫県海外子女教育国際理解教育研究会

【申し込み方法】①～③いずれかでお申し込みください。

① 右QRコード Googleform: <https://forms.gle/tQXYqjKpLq3A9XS37>

② E-mail: hyo1982kai@gmail.com

(①名前、②所属先、③理由、④質問等をメールで送信してください)

③ 会場で直接



【 連絡先 】

事務局 河野 真也(かわの しんや)

南あわじ市立沼島中学校(〒656-0961 兵庫県南あわじ市沼島992番地)

E-mail: hyo1982kai@gmail.com 携帯:090-8520-2917